

0 1 2 3 4 5
6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 m

日本窒素の諸事業

- 日本窒素肥料株式會社
566
- 朝鮮窒素肥料株式會社
- 長津江水電株式會社
- 朝鮮滿洲鴨綠江水力發電株式會社
- 日本窒素火藥株式會社
- 朝鮮窒素火藥株式會社
- 朝鮮石炭工業株式會社
- 吉林人造石油株式會社
- 旭ベンベルグ絹絲株式會社
- 日窒鑛業株式會社 其他

始



朝鮮窒素興南工場破安倉庫



第 250
456

一、聖戦と「日本窒素」

近代戦は國家總力戦であり、科學戦である。而して工業は軍備の一部であり、就中化學工業は直接戦争に關係する部門が多い。先づ火藥、爆藥等が之である。驚くべき遠距離に砲彈を發射する無煙火藥、砲彈爆彈等の中に充填さるべき炸藥、充填された炸藥が目的物に衝突して自身の爆發を誘起すべき起爆藥等の多くの火藥類は硝酸と濃硫酸とを以て特殊の原料を處理したものである。火藥工業、硝化工業の確立が國軍に取つて絶対に必要なることは周知の通りである。

「日本窒素」は我が國最大の規模を有する火藥事業を営むと同時に、又我國に於て最初に合成硝酸の製造に成功し、現に全國製造高の40%を占める我國第一の硝酸製造會社である。戦争 → 火藥 → 硝酸、此の一連の關係を考へるとき、いま「日本窒素」の果しつゝある使命の極めて重大なることは明かであらう。而して硝酸は合成アンモニアを酸化して製造されるものであるから合成アンモニア工業こそ硝酸工業の基礎であり合成アンモニア工業なくしては硝酸製造工業は確立したと云ひ得ない。硝酸工業は寧ろアンモニア合成工業の一分科工業と云ふべきであり、「日本窒素」の硝酸工業も亦合成アンモニア工業を基礎として出發したものである。

アンモニア合成工業は加之、他に極めて重大なる意義を有する。即ち窒素肥料はこのアンモニアを原料として製造されるのである。肥料問題はそのまま食料問題なのである。第一線に於ても銃後に於ても腹が減つては戦が出来ないのである。「日本窒素」は我國に於て最初に窒素肥料を製造し、現在我國最大、世界屈指の窒素肥料製造會社である。その能力は年産約80萬噸、近く着手される増産工事完成後は100萬噸となり一社にしてよく全國産額の半数以上を製造することとなる。實に我國肥料界の寶庫である。

近代戦に於て軍艦に戦車に飛行機に石油は不可欠の軍需資材である。石油の一滴は血の一滴と云はれることも強ち誇大の言とのみ云へない。「日本窒素」が人造石油事業に着手したことは既に相當以前のことであり我國に於て最初の成功をなし、北鮮阿吾地に於ける人造石油の大工場は既に大量の工業的生産をなしつゝあり、此の工業は「日本窒素」に於てそのアンモニア合成以來多年培はれ来たつた技術によつて實現せられたもので之が成功は我國化學工業の世界的誇りである。

最近著しき發展を見たるアセチレン系工業中合成醋酸、無水醋酸、醋酸纖維素、アセトン、ブタノール等「日本窒素」の製造品は直接軍の需要に充てられるものが多い。就中醋酸は「日本窒素」に於て全國の50%以上を製造し、アセトンの如きは軍需の大きな部分を「日本窒素」が納入してゐる。

國家總力戦とは軍部の設備も民間の設備も打つて一丸とし國の全能力を擧げて作戦に資することであるが、それが今如實に行はれつゝあるのである。聖戦下の我國に取つて世界屈指の大化學會社「日本窒素」の存在することは、その著しき強味であることは云ふまでもない。「日本窒素」は既成化學製品の大量供給に付て最も確實であり、新製品の産出に付て最も信頼出來ると軍部の某大官が筆者にひそかに話された事があつた。固より「日本窒素」の如き大工場設備は如何に政府の力を以てしても、戦争が始つたからと云つて一朝一夕につくる事は出來ない。假に建物や機械が出來たとしても之に生命を與ふべき技術經驗等の人的資源は之を如何ともすることが出來ない。

聖戦下に於ける「日本窒素」はいまや一營利會社として之を見るべきでなく一大綜合化學國策會社と云ふべきであらう。「日本窒素」の使命や實に重且つ大である。七萬の全従業員は今一致團結日夜感激の勤務を續けてゐる。



二、「日本窒素」の沿革

「日本窒素」は明治39年1月12日鹿兒島縣伊佐郡大口村に於て曾木電氣株式會社として資本金20萬圓を以て創立された。明治41年1月之を40萬圓とし更に8月には100萬圓に増資した。此の時空中窒素固定法を我國に於て最初に採用し石灰窒素の製造を開始せんとし社名を今日の如く日本窒素肥料株式會社と改め大阪に本社を置いた。然し石灰窒素の製造は最初意の如く進まなかつたのであるが、遂に現社長野口道氏の不撓の努力に依り成功し大正8年には鏡工場が運轉するに至り茲に「日本窒素」の基礎は確立されたのであつた。

大正12年9月にはカザレー式アンモニア合成法が宮崎縣延岡工場に於て成功した。「日本窒素」は直ちに延岡工場の大擴張を行ひ續いて水俣に合成工場を新設した。此のアンモニア合成法の採用と其の成功は「日本窒素」の中興の事業とも稱すべく之に依り「日本窒素」の新生面が開かれたのである。

「日本窒素」の多年の経験と優秀なる技術を基礎とし朝鮮に於ける大電力を利用して此の新方法に依る大硫安製造工場を建設せんとする計畫は早くも大正15年1月に朝鮮水電株式會社(資本金2,000萬圓)の創立となつてあらはれた。朝鮮水電は咸鏡南道赴戰江の水利に依る〇〇萬キロワットの電力を以て50萬噸の硫安を製造せんとする「日本窒素」の大抱負實行の尖兵であつた。續いて昭和2年5月には待望の朝鮮窒素肥料株式會社(當時資本金1,000萬圓—現在7,000萬圓)が創立された。「日本窒素」は之により50萬噸の硫安を製造し28萬噸に上る輸入硫安を駆逐し通商の硫安は之を輸出する決心であつた。而して朝鮮水電及び朝鮮窒素の二社は興南工場、赴戰江發電所の第一期工事の完成と共に昭和5年1月合併し名實共に一體となつて操業を開始した。此の赴戰江水利を開發し發電所、堰堤を建設するに當つて水壓鐵管、發電機、水車等の機械類、セメント、鐵筋等の材料、職人夫の往來、食糧品の運搬のため昭和5年1月新興鐵道株式會社(當時資本金80萬圓—現在200萬圓)が設立せられた。而して新興鐵道は後昭和8年長津江水利の開發に當つても之が工事のために要する運輸設備を擔當することゝなつた。

之より先「日本窒素」は既に優良なる硝酸、硫酸、硝酸アンモニア等を多量に製造してゐた。之等は何れも火薬の原料であるから之を利用してダイナマイトを製造すべく、昭和5年12月には日本窒素火薬株式會社(當時資本金100萬圓—現在700萬圓)が設立せられた。火薬の他の重要原料グリセリンは興南工場にて製造供給することゝなつた。

「日本窒素」の人絹部門としては始め野口氏個人に依り設立せられた旭絹織株式會社(資本金800萬圓)があつたが之と、銅アンモニア法に依りベンベルグ絹織を製造する日本ベンベルグ絹織株式會社(資本金1,800萬圓)と、日本窒素延

延岡アンモニア合成工場スタート直後カザレー氏
を圍む野口市川現正副社長等幹部——大正12年



鴨綠江水電水壩堰堤工事場に於ける
野口社長及び其の一行——昭和14年



岡工場を分離獨立せしめて設立した延岡アンモニア絹織株式會社(資本金2,000萬圓)とを經營の合理化と生産費の低減を計るため昭和8年5月合併して資本金4,600萬圓の大人絹織會社となし社名を旭ベンベルグ絹織株式會社と改めた。

「日本窒素」は又朝鮮興南工場の百年の電源を確立し且つその大發展を企圖して長津江の水利を開發し〇〇萬キロワットの電力を發電することゝなつた。之が工事のため昭和8年5月長津江水電株式會社(當時時資本金2,000萬圓—現在15,000萬圓)が設立せられた。長津江水電は朝鮮電氣事業統制計畫に基き豊富低廉なる電力を供給することに依り重要産業の興隆を促すことを目的としてゐる。従つて之が送電のため昭和9年5月設立せられたのが朝鮮送電株式會社(資本金1,500萬圓)で「日本窒素」はその株式の過半数を占め其の實際の仕事に當つてゐる。

同じく昭和9年6月には極めて豊富なる電力と北鮮に産する品質鐵量共に世界有數なるマグネサイト鑛石を利用するため日本マグネシウム金屬株式會社(當時資本金140萬圓—現在420萬圓)が設立された。之は電氣爐還元法に依り金屬マグネシウムの製造をなさんとするもので世界唯一の製造法を採用してゐる。

朝鮮窒素は昭和6年7月永安に石炭低溫乾溜工場の建設を始めたが、その基礎の確立すると共に昭和10年8月永安工場は朝鮮窒素より分離し朝鮮石炭工業株式會社(資本金1,000萬圓)として獨立した。朝鮮石炭工業は次いで永安工場に於ける多年の苦心と經驗を基礎とし人造石油の大規模製造に乘出すべく灰岩工場を建設した。後同社は永安工場を朝鮮窒素に復歸せしめ現在は灰岩工場の事業に専念してゐる。

「日本窒素」は硫酸の原料たる硫化鐵石を大量に使用するため早くから鑛山の自家經營をなしてゐたが之等鑛山の經營統制のため一括して獨立の一會社たらしめ昭和10年4月日窒鑛業株式會社(資本金500萬圓)を設立した。更に進んで硫黃、水銀の製鍊をも行ふことゝなり昭和10年4月日窒硫黃鑛業株式會社(當時資本金150萬圓—現在300萬圓)、昭和11年10月東洋水銀鑛業株式會社(資本金800萬圓)を夫々經營するに至つた。

昭和10年4月には「日本窒素」の火薬事業を大發展せしむべく朝鮮窒素火薬株式會社(當時資本金100萬圓—現在1,000萬圓)が設立せられ興南に工場を置き朝鮮窒素より原料の供給を受け火薬を製造し朝鮮及び大陸の市場を開拓することゝなつた。

長津江水力發電工事の建設を完了した長津江水電株式會社は更に盧川江の水利を開發することゝなり之が資材運送のため昭和12年1月端豐鐵道株式會社(資本金500萬圓)が創立せられた。

赴戰江、長津江等の大水力發電工事を美事になし遂げた「日本窒素」は出力〇〇〇萬キロワットと云ふ世界の發電工史を飾る鴨綠江水利の開發に乘り出すことゝなつた。即ち昭和12年8月滿洲鴨綠江水力發電株式會社(資本金5,000萬圓)昭和12年9月朝鮮鴨綠江水力發電株式會社(資本金5,000萬圓)が夫々設立せられた。鴨綠江が國際河川なる特殊事情のため兩會社を同時に設立したもので何れも滿洲國政府、「日本窒素」、東洋拓殖株式會社その他の出資に依るものである。之が工事に關し運送機關としては平北鐵道、鴨北鐵道兩株式會社(資本金各1,000萬圓)が設立せられ又鴨綠江の舟運、流筏處理のため朝鮮鴨綠江航運株式會社、滿洲鴨綠江航運株式會社が設立せられた。

昭和18年10月には野口市川兩氏等が經營せられ光陽金山を本據として鮮内に重きをなす日窒鑛業開發株式會社(現在資本金1,000萬圓)が「日本窒素」の傘下に入り金鑛の外硫化鐵石、明礬石等の鑛山をも經營することゝなつた。

朝鮮石炭工業灰岩工場に於ける人造石油事業の輝き成功は滿洲國産業計畫に盛られた石炭液化事業に「日本窒素」を關與せしむることゝなり昭和14年9月には吉林人造石油株式會社(資本金1億圓)が設立された。之は滿洲國政府、日本窒素肥料株式會社、帝國燃料興業株式會社の出資に依るものである。原料石炭は滿洲國遼寧の大炭田を開發し吉林工場に輸送するものであるが此のため舒蘭炭鑛株式會社(資本金1,000萬圓)、吉林鐵道株式會社(資本金500萬圓)が設立された。

而して上記諸會社を統率する日本窒素肥料株式會社は昭和12年資本金を2億圓に増加した。明治39年20萬圓の資本金を以て創立以來30年にして1,000倍となつたわけである。此の30餘年の「日本窒素」の歴史はそのまゝ日本化學工業史であると云ふも過言でないであらう。アンモニア合成の成功以來、硝酸、醋酸、アセトン、ブタノールの製造、人造石油の製造等斯界のバイオニーヤとして輝き功績を残すもので、更に今後の活躍發展が刻日期待されてゐる。

三、「日本窒素」の経営、組織及び統制

日本窒素肥料株式会社の資産は、其の財産目録に依れば約5億圓である。然し此の数字は「日本窒素」の眞の姿を表してゐない。「日本窒素」は例へば朝鮮窒素肥料株式会社、長津江水電株式会社の如き「億」の單位の資産を有する大会社の株式を全部所有してゐるのである。又日本窒素火薬株式会社、朝鮮窒素火薬株式会社、朝鮮石炭工業株式会社、日窒鑛業開發株式会社の如き何千萬圓の大会社の株式をも全部所有してゐるのである。かうした觀點からすれば例へば朝鮮窒素は「日本窒素」の有する一工場であり、長津江水電は「日本窒素」所有の發電所であると云ふ事が出来る。然も朝鮮窒素の如きは昭和8年以來一回の配當をもなさず毎半期1,000萬圓を超えるその利得は全部内部保留に充てられてゐるのであるから其の資産の眞價は想像以上巨大なるものである。同様の事は長津江水電に付ても又他の直系子会社に於ても云ひ得る。

「日本窒素」の全資産を直系子会社の貸借対照表より綜合計算すればそれは大體7億圓と算定される。然も此の数字は年々の莫大なる當該会社の銷却金を含まないから、若し之を加へて計算するときは更に大きなものとなる。そしてそれが即ち「日本窒素」の實力なのである。

「日本窒素」と云ふ此の類まれなる大企業は如何に組織されてゐるのであるか？ この大コンツェルンは如何にもよく統制されてゐるがどんな仕組になつてゐるか？ 要するに「日本窒素」は一個の会社であるからよく統一されてゐるのである。謂はゞ他人を交へぬ水入らずの会社であるからよくまとまつてゐるのである。「日本窒素」自身が大きくなつて行つたので他の会社を合併したり買収したりして今日の大をなしたのではない。7,000萬圓の朝鮮窒素も1億5千萬圓の長津江も皆「日本窒素」それ自身であつて他人が運入つて來たのではない。同じ身内なのである。社長、副社長は創立以來会社を支配して來た人々である。その他の最高幹部も皆此の会社で成人した人々である。自己の力に依つて發展し敢て他人の恩澤を求めざる此の「日本窒素」の根本方針と過去の歴史とは今日に於て益々光彩を放ちここに七萬の全従業員の一糸紊れざる大企業を現出してゐるのである。

「日本窒素」が極めてよく統一されてゐることは「日本窒素」の發展の経過を觀てもよく理解される所であるが、又それはその現在の機構の上に於ても之を發見することが出来る。例へば之を用度事務に付て見ても多數の各子会社の用度品は全部「日本窒素」本社購買部が其の購入事務を司つてゐる、地方的に特殊の事情あるもののみが例外となつてゐるのである。又數百種に及ぶ各社の製品も其の全部が「日本窒素」本社營業部に依つて販賣されてゐる。もとより特殊な製品に付ては一二の例外があるが、かくの如く用度品の購入と製品の販賣とが本社一個所の購買部、營業部にまとめられてゐることは眞に稀に觀る所であつて我國並に世界の大大コンツェルンに於てその例を見ない。それは個々獨立の各企業を親会社が統制してゐると言ふよりも寧ろ同一組織内の各々の部門が場所を變へて存すると云ふべきであらう。

「日本窒素」の組織に於ては會計金融に付ても同様であつて重要な會計金融の仕事は全部「日本窒素」本社會計部が直接其の衝に當つてゐる。又全コンツェルン統制によつて最も肝要なる人事に付ては勿論「日本窒素」本社人事部が之を司る。その他の庶務に關する重要事項も「日本窒素」本社庶務部の指示を俟つて行はれてゐる。

技術に關する事項に付ても、或る一つの社の發明は即ち全「日本窒素」の發明とされ、一つの社の有する經驗は亦全「日本窒素」の經驗として各社に應用實施されてゐる。加之各社各工場の研究、調査、技術の相互連絡、採擇は緊密に行はれ、各々専門を異にする多數の青年技術者は定期的に技術會議を開催してその技術の研鑽と相互の利用に心を配り、綜合化學工業會社「日本窒素」の特徴を益々發揮すべく努力を續けてゐる。

四、各事業地の福利施設

「日本窒素」の事業は主として朝鮮及び九州に於て營まれてゐる。工場所在地は多くは最初住民稀なる荒蕪の地であつたのだが、工場の發展と共に忽ちにして一寒村より近代的工業都市に飛躍するのが常である。

その最も代表的なものが朝鮮咸鏡南道興南邑である。15年前二、三十戸の鮮人漁民が散在する小部落に過ぎなかつたものが目眩しい速度で日本海岸第一の理想的工業都市を形成することとなり、人口10萬を數ふるに至つたのである。

工場所在地には従業員のための住宅が附近の空氣清澄なる地點に建設せられてゐる。住宅には社員社宅、準社員社宅、傭員社宅とあり又獨身者を收容する合宿がある。社宅、合宿には電氣、上下水道の設備は勿論、淨化装置等近代的設備が行届いてゐる。殊に朝鮮の社宅はすべて煉瓦作りの防寒建築であり暖房設備が完備されてゐる。旭ペンベルグ延岡工場では女子従業員を多數使用する關係上特に女子従業員に對する施設に意を注いでゐる。

醫療設備としては会社の附屬病院が従業員及びその家族の保健のために設けられ、内科外科は勿論X線科齒科眼科に到るまで全科兼備し入院の便もあり且つレントゲン、太陽燈等の近代的醫療器械の設備に遺憾なきを期してゐる。

従業員の子弟の教育のためには小學校中學校女學校が設立せられ、校舎は会社に於て建設し奉安殿講堂等その設備が完備してゐる。従業員のためには青年學校あり又養成所を設けて従業員として必要な知識技能を授けてゐる。

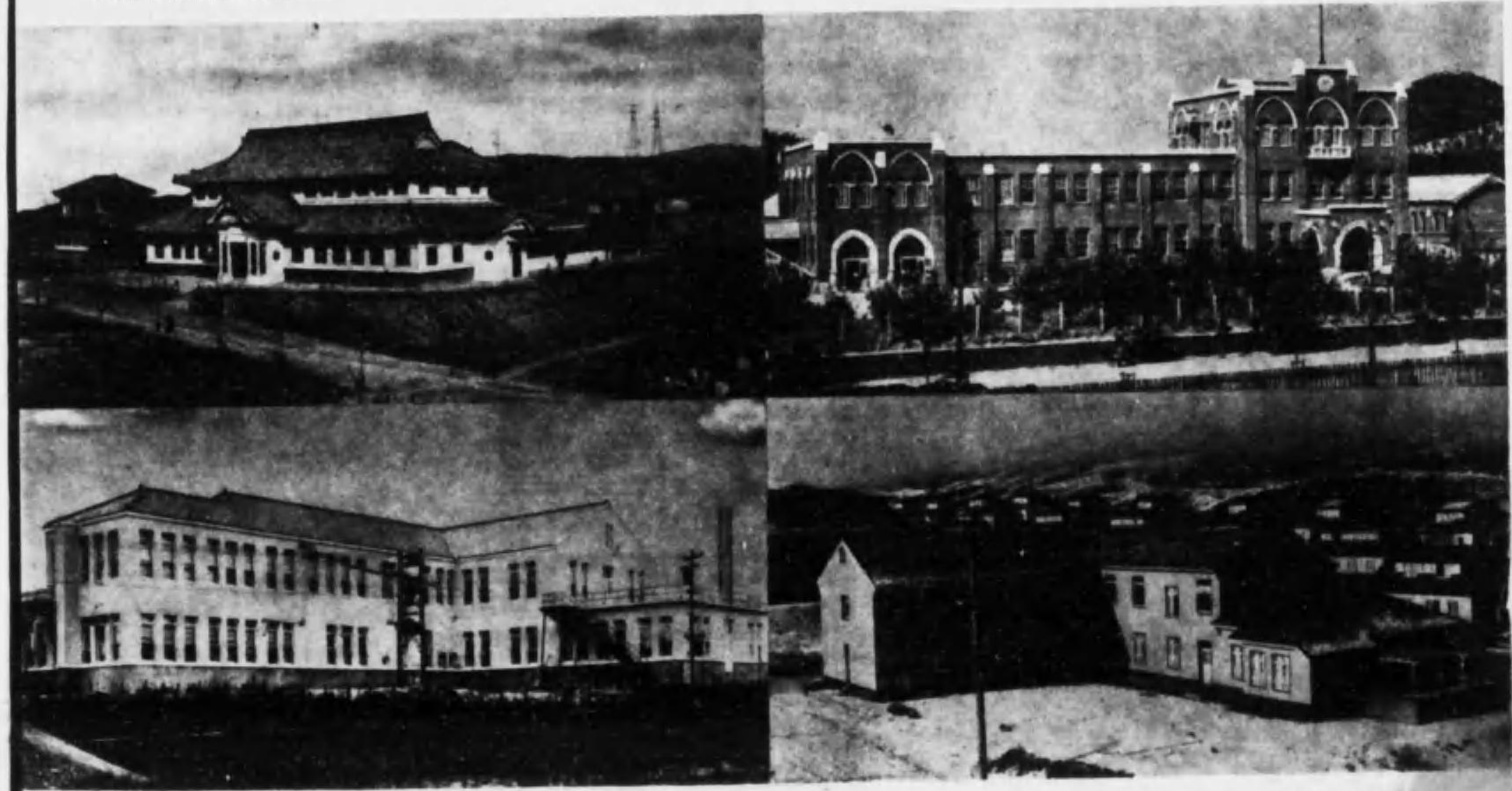
社宅の中心には生活日用品のために会社直營の供給所があり、米醬油の食料品から呉服雜貨その他百貨萬般が求められ、その規模は都市の大デパートに比肩し得るものがある。興南供給所の如きは京阪の三越よりも賣上高が多いと云ふ盛況である。而も販賣品は利益を目的とせず市價より遙かに安價に提供せられ、購入は現金に依る外、一定額までは傳票制度に依つて掛買をなし得、又高價品に對しては月賦購入の便宜もある。別に白米を安價に供給する制度がある。

娛樂設備としては圖書室室内遊戯設備のある俱樂部、陸上競技場、野球場、テニスコート、水泳プール、武道場等多種多様の施設があり各人の自由使用が許されてゐる。殊に興南の武徳殿は朝鮮第一のものである。

かくる完備せる施設に依り國家的大企業に邁進しつつある7萬の従業員は僻遠の地にありても一日の疲勞を忘れ、その家族は平和な生活を樂しんでゐる。

朝鮮窒素興南工場武徳殿

興南公立高等女學校



朝鮮石炭工業灰岩工場附屬病院（羅津要塞司令部許可済）

鴨綠江水電水豊發電所社員合宿

五、「日本窒素」關係會社一覽

社名	公稱資本金 (千圓)	實收資本金 (千圓)	主なる事業	主なる事業所
日本窒素肥料株式會社	200,000	172,500	肥料、工業藥品等の製造、全「日本窒素」製品の販賣	本社：大阪 工場：水俣、本宮 事務所：東京、京城
朝鮮窒素肥料株式會社	70,000	62,500	肥料、油質製品、石灰低濃硫酸製品、金属の製造、地盤下に於ける水力発電	本社：興南 工場：興南、永安 事務所：宋乙、吉州、龍門等
旭ペンベルグ硝子株式會社	46,000	87,000	人造硝子の製造販賣、工業藥品、肥料の製造	本社：大阪 工場：天津、延岡
朝鮮石炭工業株式會社	10,000	10,000	人造石油の製造	本社：友邦(咸鏡北道) 工場：友邦 事務所：阿晋地、承貞
吉林人造石油株式會社	100,000	80,000	人造石油の製造	本社：新京 工場：吉林
日本窒素火薬株式會社	7,000	7,000	火薬、火工品類、可塑物の製造	本社：大阪 工場：延岡、小倉
朝鮮窒素火薬株式會社	10,000	10,000	火薬、火工品類の製造、朝鮮、滿洲に於ける販賣	本社：興南 工場：興南
東京火薬工業株式會社	1,000	1,000	雷管、導火線、其他火工品の製造	本社：東京 工場：東京、基山 (佐賀縣)
日本マグネシウム金屬株式會社	4,200	4,200	金属マグネシウム及び其の合金の製造	本社：興南 工場：興南 事務所：北斗(咸鏡北道清川郡)
日窒寶石株式會社	500	500	各種合成寶石の製造加工	本社：大阪 工場：興南、尼崎
長津江水電株式會社	150,000	110,000	長津江並に盧川江に於ける水力発電	本社：京城 事務所：長津江第一、第二、第三、第四
朝鮮鴨綠江水力発電株式會社	50,000	50,000	鴨綠江に於ける水力発電	本社：京城 事務所：水豐(平安北道)
滿洲鴨綠江水力発電株式會社	50,000	50,000	鴨綠江に於ける水力発電	本社：新京 事務所：水豐(平安北道)
朝鮮發電株式會社	15,000	15,000	長津江水電、鴨綠江水力発電兩社の發電カ力の配電	本社：京城 事務所：京城、平壤、雲山
日窒鑛業開發株式會社	10,000	10,000	朝鮮に於ける金属、硫化物、明礬石、其他礦産物の探採、金属、銅、鉛の製錬、硫酸の製造	本社：京城 事務所：興南、龍泉 事務所：光陽、吉津、慈城、文明、昌道等
日窒鑛業株式會社	5,000	1,250	内地に於ける硫化物、水銀礦、石灰、其他礦産物の探採製錬、硫酸の製造	本社：大阪 事務所：秋友、土倉、財本、江田、十津等
日窒硫黄鑛業株式會社	8,000	1,875	富津白嶺、横手山の兩硫黄鑛山に於ける硫黄の探採製錬	本社：東京 事務所：富津、横手山
東洋水銀鑛業株式會社	8,000	8,000	北海道天鹽鑛山に於ける水銀礦の探採製錬	本社：大阪 事務所：天鹽(北海道)
大和アンチモン株式會社	200	200	奈良縣神戶鑛山に於けるアンチモン礦の探採製錬	本社：大阪 事務所：神戶(奈良縣)
廣長金山株式會社	500	500	朝鮮廣長金山に於ける金属の探採	本社：京城 事務所：龍南(咸鏡北道)
許蘭炭鑛株式會社	10,000	5,000	滿洲許蘭炭田に於ける石炭の探採	本社：吉林 事務所：許蘭
朝鮮水産工業株式會社	1,000	500	朝鮮に於ける魚其他水産物の漁獲と水産物加工品の製造	本社：雄基 工場：雄基
成興合同木材株式會社	8,000	8,000	朝鮮咸鏡地方に於ける木材の伐採と製材、製材地盤江、長津江兩發電事業地と興南附近事業地間に於ける鐵道の經營	本社：咸興 出張所：惠山
新興鐵道株式會社	2,000	1,520	盧川江發電事業地に於ける鐵道の經營	本社：興南
瑞豐鐵道株式會社	5,000	5,000	鴨綠江發電事業地に於ける朝鮮側鐵道の經營	本社：京城 事務所：鎮川
平北鐵道株式會社	10,000	10,000	鴨綠江發電事業地に於ける朝鮮側鐵道の經營	本社：京城 事務所：慶州
鴨北鐵道株式會社	10,000	7,500	鴨綠江發電事業地に於ける滿洲側鐵道の經營	本社：新京
朝鮮鴨綠江航運株式會社	188	188	鴨綠江に於ける朝鮮側河川運送の經營	本社：新義州
滿洲鴨綠江航運株式會社	750	750	鴨綠江に於ける滿洲側河川運送の經營	本社：安東(滿洲國)
國境交通株式會社	100	100	鴨綠江朝鮮沿岸に於ける自動車運送の經營	本社：新義州
吉林鐵道株式會社	5,000	1,250	許蘭炭田と吉林人造石油工場を結ぶ鐵道の經營	本社：吉林
吉林運輸株式會社	450	225	吉林人造石油關係貨物の運搬輸送	本社：吉林
草野電氣鐵道株式會社	2,000	2,000	許蘭炭田と吉林人造石油工場を結ぶ鐵道の經營(主として草津硫黄鑛山産物を運搬す)	本社：東京 事務所：柳井澤
株式會社富田商會	1,000	1,000	「日本窒素」製品、原材料其他物資の運搬輸送	本社：大阪 支店：興南、本宮 出張所：東京、水俣、延岡、新舞
窒素肥料販賣株式會社	1,000	1,000	「日本窒素」製造の肥料、工業藥品、燃料、油質製品等の販賣	本社：大阪 支店：京城、市野 所：釜山、蔚山、平壤、清津、奉天、天津
株式會社日之丸商會	800	150	「日本窒素」製造の肥料、工業藥品、燃料、油質製品等の九州中國方面に於ける販賣	本社：下關 支店：熊本
東洋火薬株式會社	100	25	「日本窒素」製造の火薬火工品類の中華民國に於ける販賣	本社：天津
株式會社朝鮮ビルディング	2,000	500	「朝鮮ビルディング」の經營	本社：京城
延岡土地住宅株式會社	500	200	旭ペンベルグ硝子、日本窒素火薬兩社延岡工場従業員住宅の建設、賃貸	本社：延岡
日窒證券株式會社	10,000	5,000	株式、社債の引受買賣	本社：大阪
旭染工株式會社	550	275	「日本窒素」製造の人造硝子其他硝子類の染色、精練、加工	本社：大阪 工場：大阪
旭硝子株式會社	250	250	「日本窒素」製造の人造硝子其他硝子類の製錬、加工	本社：大阪 工場：川内(鹿児島縣)
日本水電株式會社	20,000	12,205	九州南部地方に於ける水力発電、その配電並に電燈、電力の供給	本社：鹿児島 支店：川内、加世田
東洋工業株式會社	15,000	7,500	製粉機、空壓機、自動車、其他各種精密機械類の製造販賣	本社：府中(廣島縣) 工場：府中 出張所：東京、大阪、小倉、京城

六、「日本窒素」事業地地圖

七、「日本窒素」製品一覧

肥料

硫酸安
 硫酸安(化成肥料)
 硫酸加磷安(化成肥料)
 石灰窒素
 過磷酸石灰
 磷酸アンモニア
 肥料用
 鹽化アンモニア
 調合肥料

工業薬品

硝酸(90%、98%)
 硝酸アンモニア
 亜硝酸曹達
 液體アンモニア
 無水アンモニア
 アンモニア水
 窒素ガス
 酸素
 水素
 硫酸
 ソーダ灰
 苛性ソーダ
 晒粉
 鹽酸
 液體鹽素
 工業用
 鹽化アンモニア
 鹽酸加里
 珪酸曹達
 酸性油
 メタノール
 ホルマリン
 ヘキサメチレントトラミン
 ベンタエリスリット
 氷醋酸
 無水醋酸
 アセトン
 ブタノール
 メシチルオキサイド
 トリアセチン
 醋酸エチル
 エチレングリコール
 ゴム老化防止劑
 ゴム硫化促進劑
 酸蝕抑制劑

ミナリット(肥料用)

硝化綿

[ラッカー用、レザー用、
 コロイド用、フィルム
 用、セルロイド用]

ティツシユペーパー

アクリル樹脂

ニポリット(鹽化ビニール樹脂)

ヴィニールアセテート樹脂

チツソラック(合成セラック)

火薬

硝質ダイナマイト

硝安ダイナマイト

硝安爆薬

黒色火薬

カーリット

緩燃導火線

雷管

特殊火工品

油脂

硬化油

グリセリン

脂肪酸

ステロール

高度ステロール

ステアリン酸

ゴム用ステアリン酸

チツソ石鹼

ダークオイル

脂肪酸ピッチ

バラフィン

人造絹絲

ベンベルグ絹絲

ヴァイスゴース人絹

ステーブルファイバー

ステーブルファイバー

醋酸人絹(ニナリス、セラニット)

醋酸ステーブルファイバー

(ニナリス)

更生絲

人絹織物

ハンカチーフ

燃料、炭素製品

石炭

揮発油

軽油

重油

ピツチ

メチ(精糖原料)

カーバイド

アークカーボン
 [炭素用、電極用、電機用、
 電機用、電機用、電機用、
 電機用、電機用、電機用]

カーボン刷子

電極(電解用、電機用)

黒鉛粉末

アセチレンブラック

金属、礦物

金

銀

電気銅

電気鉛

電気亜鉛

鉄

珪素

錳

マグネシウム

アルミニウム

水銀

硫黄

磁鐵

錳

マグネサイト

マグネシアクリンカー

セメント

合成寶石(電機用、計測用、工業用)

チツソミンチン(高級化上研精)

チツソランダム(アルミナ研精)

ダイマランダム(炭化珪研精)

その他

チツソライト(石灰燻蒸合成炭素)

[レジン、粉、ペース、食料着色、香料、
 ロッド、パイプ、キヤー、炭製品]

チツソロイド(無機セルロイド)

ミナロイド(無機セルロイド)

クラレックス(アクリル樹脂)

チツソレザー(織物)

旭味(調味料)

アミノ酸醬油

小麦粉澱粉

チツソタイン(大豆粉)

チツソグルー(大豆グルー)

鑿岩機

空気壓縮機

八、日本窒素肥料株式会社

1. 水俣工場

水俣工場は日本窒素肥料株式会社の最初の工場でカーバイド製造工場として出発し、その後石灰窒素及び硫酸を製造したが、現在の事業は合成アンモニアを基點とする硫酸、硝酸等の系統と、カーバイドを基點とする醋酸、無水醋酸、醋酸纖維素、アセトン等の系統とに大別される。

水俣工場のアンモニア合成工場は延岡工場に於けるカザレー法の最初の成功に引續き擴張建設せられたもので硫酸の製造が主要目的であつた。その後硝酸工場が建設せられ、更にカーバイド誘導工業が盛となるに伴ひ同工場に於ける硫酸事業の重要性は比較的減少したが、硝酸は本邦有数の大規模のもので、延岡興南のものと同じく「日窒式」製法に依り其の運轉の順調確實なることは現下の状態に於て特に絶大の期待と信頼とが懸けられてゐる。又水俣工場は硫酸用及び硝酸濃縮用等に必要なる硫酸を自給する大規模の硫酸工場をも有してゐる。

カーバイドは全部自家用として消費され之より誘導される合成醋酸、無水醋酸等の製造は水俣工場が本邦の嚆矢であり、且つ本邦最大の生産高(全體の50%以上)を有し、食酢用、製薬其他工業原料用として賞用されてゐる。アセトン、醋酸纖維素も亦國産品として最初の然も品質極めて優秀なるもので當時全部を輸入に仰いでゐた飛行機翼材料原料として朝野の渴望をみたしたものである。アセトンは其の他溶剤、工業原料等として廣汎な用途を持ち、醋酸纖維素は醋酸人絹、不燃性の醋酸セルロイド、フィルム、塗料、可塑物等の原料として次々と新規の用途を開拓しつゝある。

水俣工場は熊本縣水俣町にあり、現在15萬坪の敷地と約3,000人の従業員を擁し、専用の梅戸港、9ヶ所の自家発電所出力63,500キロワットを有する大工場となり、尙不斷に工場の新設擴張を行ひつゝある。

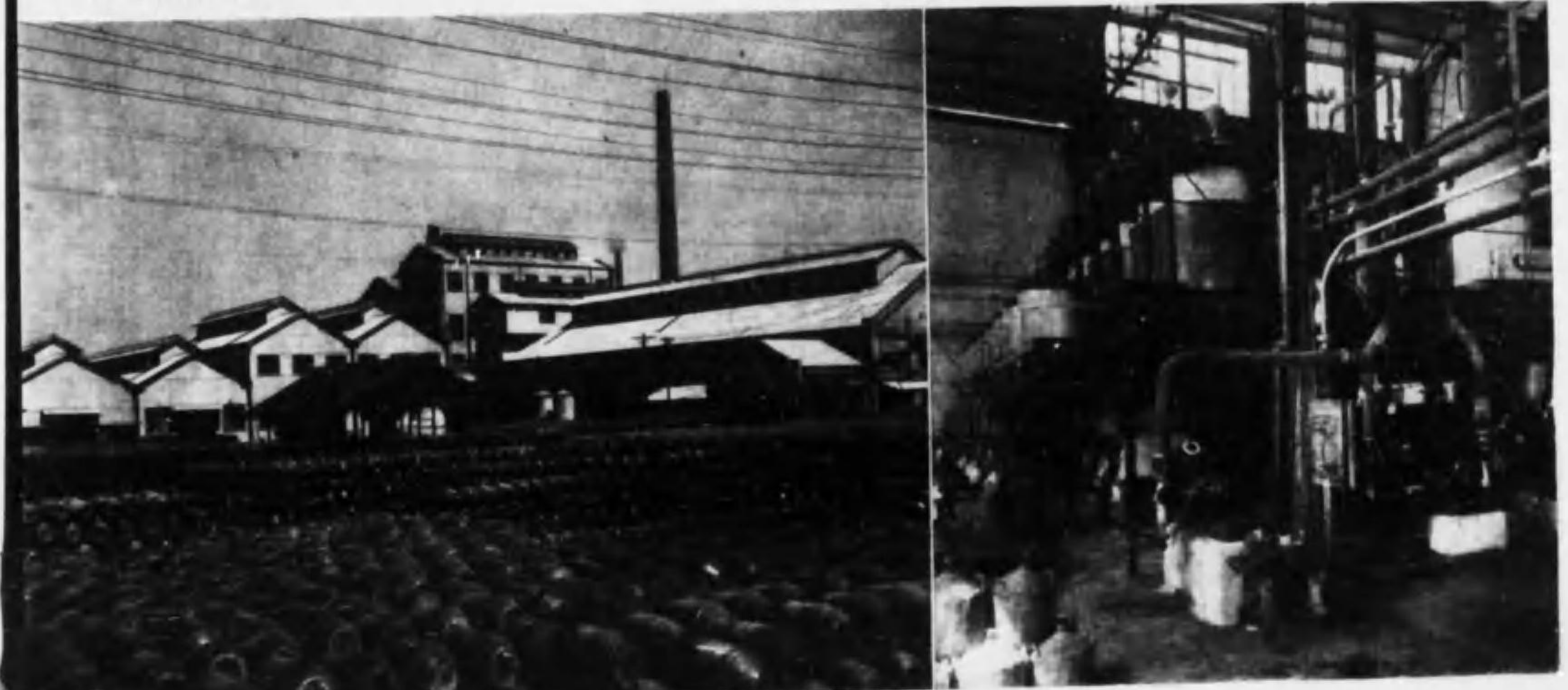
2. 本宮工場

日本窒素肥料株式会社所属工場としては水俣工場の外に本宮工場がある。本宮工場は昭和10年より朝鮮窒素肥料株式会社興南工場の近傍に建設せられたもので、朝鮮窒素興南工場の延長として技術上密接なる連繫を保ちつゝ次々と新事業が實施せられつゝあり其の經營は一切朝鮮窒素に委託されてゐる。

現在同工場の事業の中心は苛性ソーダ、ソーダ灰及び之に關聯する晒粉、液體鹽素、鹽酸、鹽化アンモン、調味料、チツソグルー等の事業並にカーバイド及び之に關聯する石灰窒素、アセチレンブラック、アセトン、ブタノール、チツソランダム等の事業である。最近新に一大國策的の事業に着手した。尙之等の詳細は朝鮮窒素肥料株式会社の項に譲る。

日本窒素水俣硝化工場

日本窒素水俣醋酸工場



九、朝鮮窒素肥料株式会社

1. 興南工場

朝鮮窒素肥料株式会社は現在資本金 7,000 萬圓にして其の事業は興南、永安兩工場に於て行はれてゐる。而して本宮工場は現在は日本窒素肥料株式会社の所有に屬し、其の事業は日本窒素肥料のものであるが其の經營は一切朝鮮窒素に任されてゐるのであるから茲に於ては興南本宮兩工場を區別せず一體として事業の種類に應じて説明することとする。

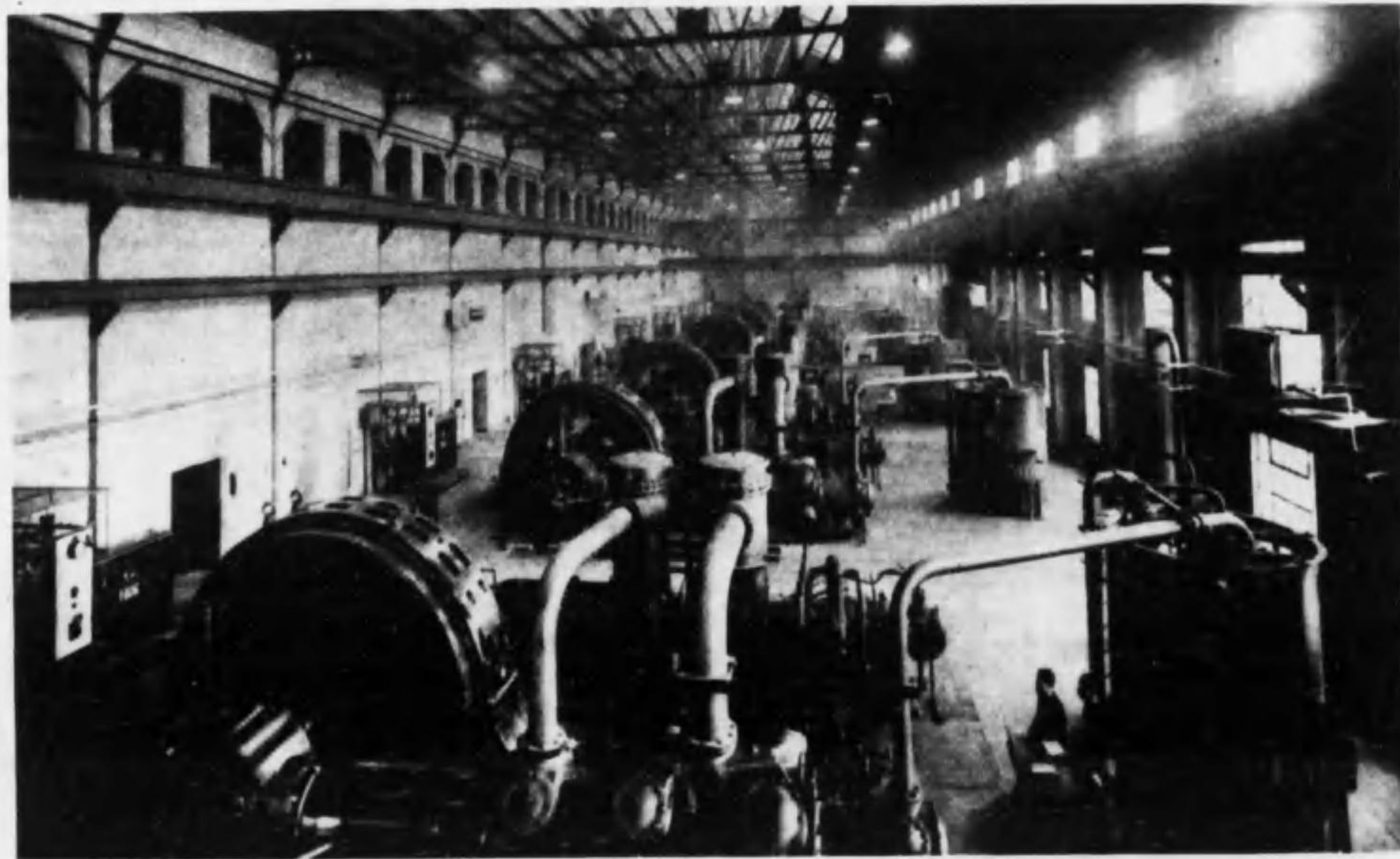
一、發電事業

朝鮮窒素所屬の赴戰江發電所は興南の北方に屹立する赴戰嶺の山麓に在り、頂上赴戰嶺に連なる高原地帯を北流して鴨綠江に注ぐ赴戰江を堰きとめて一大人造湖となし、その水を蜿蜒數里の隧道を通じて分水嶺の反對側に導き、之より數千尺の下に在る山麓の發電所に落下せしめて〇〇萬キロワットの電力を發生せしめてゐる。此の赴戰江の發電工事の方式は北鮮に於ける特殊の地形を巧に利用せるユニークな構想に成るもので其の發電量龐大なるのみならず常時最大出力を維持することが出来、建設費も頗る割安である故文字通り豊富低廉なる電力を確保し得るのである。

〇〇萬キロワットの赴戰江水力發電工事は「日本窒素」の事業を一躍世界的水準に持ち來したのみならず朝鮮半島に新たなる我國の大工業地帯を出現せしむる機縁となつたものである。

赴戰江の發電工事は約 3,500 萬圓の巨費を投じてなされた大工事であるが、その發電出力も亦甚だ大であるので一キロワット當りの建設費は僅かに〇〇〇圓餘に過ぎぬ。然も貯水池式發電所の特徴として貯めた水を年平均して流出せしめて使用するからその出力は年間を通じて常時に最大出力を發揮せしめ得る。内地の水力發電所の如くに洪水期には能力の半分しか出し得ないものとは根本的に區別して考へる必要がある。

朝鮮窒素興南アンモニア合成工場



二、肥料事業

朝鮮窒素肥料株式会社興南工場は我國が世界に誇る大化學工場である。獨逸 I.G. のロイナ工場、英吉利 I.C.I. のピリンガム工場、亞米利加のデュボン會社の工場、日本の興南工場は今世紀の人類が有する最大の化學工場である。世界の化學工場は此處に其の粹を集め此處より發展してゐると云つて過言でない。興南工場に於ては數多の化學、金屬の事業が營まれてゐるが就中最大なるものは硫安その他の肥料事業である。その肥料の生産能力は78萬噸、擴張後は96萬噸に達する大規模のもので、合成アンモニアの成功に依つて大進展を來した「日本窒素」の肥料事業は朝鮮の興南、本宮兩工場に於てその多年の宿願たる世界的大工業を現出せしめたのである。肥料の内硫安が最大部分を占め、その他硫燐安、硫加燐安、過燐酸石灰、鹽化アンモニア、燐酸アンモニア及び石灰窒素等が製造されてゐる。之に要する常時30餘萬キロワットに及ぶ電力は前述の直屬赴戰江發電所及び長津江水電株式會社所屬長津江發電所より送られて來るものである。

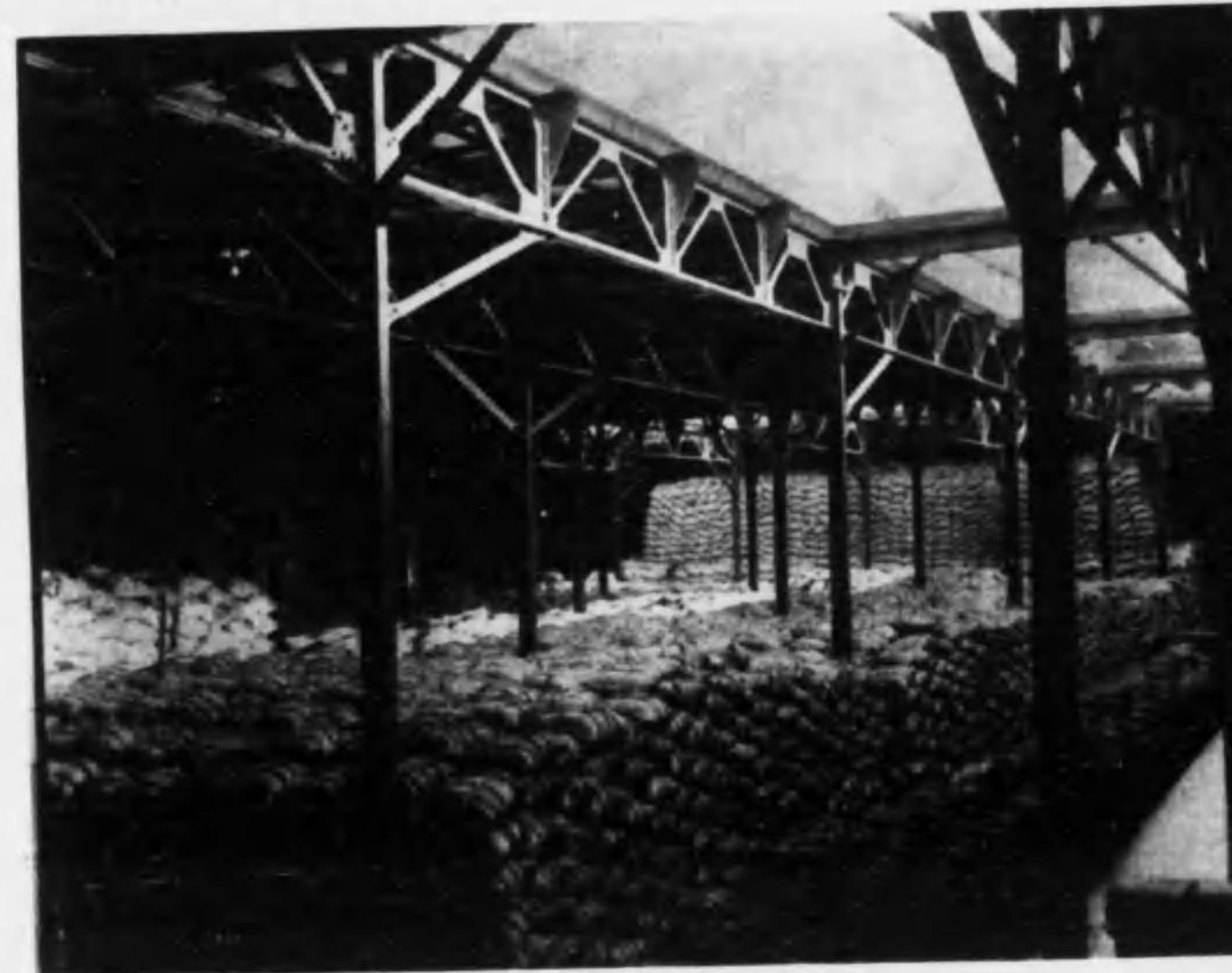
興南工場の事業は肥料から發足して今やあらゆる化學工業の全分野に及び我國に於ける化學製品の寶庫と云はれるに至つた。北鮮の大水力發電工事の開發とこれに伴ふ大化學工場の建設とは僅々十數年間になされた驚嘆すべき大事業であるが東亞と歐洲の現下の非常事態に際して絶大の意義を發揮し來つたと云ふべきであらう。

三、油脂事業

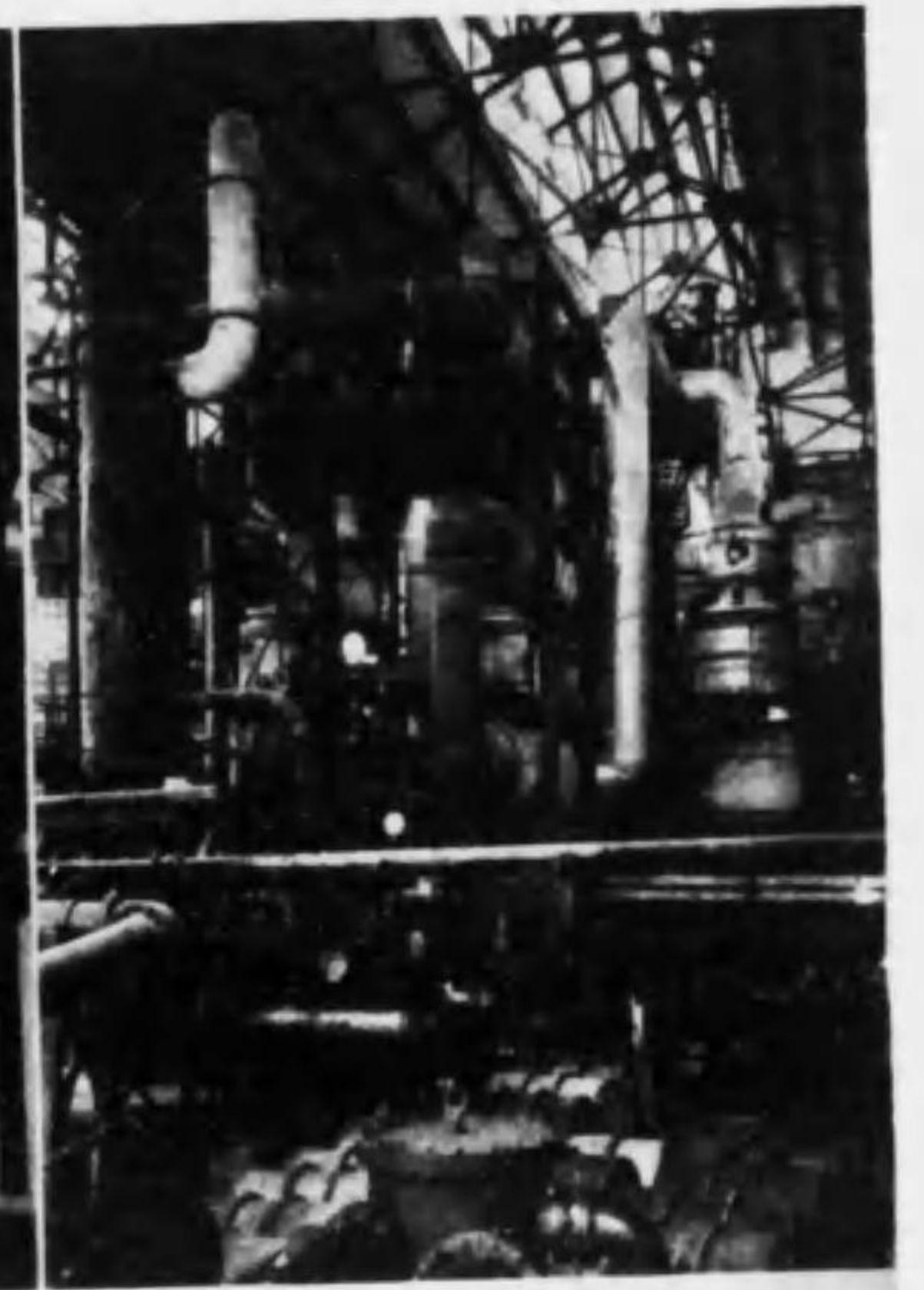
油脂事業は火藥の原料グリセリンを自給するの目的から創められた。ダイナマイトの主成分はグリセリンを硝化したるニトログリセリンであるが、其のグリセリンは鰵油に水素を添加して硬化油となし之より分離蒸留せられたものである。北鮮は鰵の有數の漁場であつて、本邦全産額の70%以上を占め、朝鮮窒素肥料興南工場は其の半分（即ち全産額の35%）を使用してゐるのであるから其の油脂事業の規模の如何に大なるかが想像されよう。然も同工場は魚油の大量購入に最も便利な地點に在る上、其の硬化に要する水素は肥料工場で多量に安價に製造されるので、油脂工場として實に有利な條件に恵まれてゐると言はねばならぬ。

興南工場の油脂事業の規模は硬化油45,000 噸、グリセリン2,600 噸、脂肪酸40,000 噸、石鹼4,000 噸の年産能力を有する巨大なもので一個の工場として我國最大のものである。

朝鮮窒素興南工場硫安倉庫



朝鮮窒素興南グリセリン工場



四、カーバイド事業及びカーボン事業

本宮工場のカーバイド事業はその大電力を利用すべく最初石灰窒素の製造を目的として始められたが最近には更にアセトン、ブタノール等の溶剤製造等カーバイド誘導工業への進展を示しつつある。カーバイドのみの工業としても規模頗る大なるもので現在年産10萬尾、更に15萬尾に擴張中である。

カーバイド工業製品としてアセトン、ブタノール及びアセチレンブラック等が製造されてゐる。アセトン、ブタノールは何れも化学溶剤として重要なものに拘らず事變以來輸入が抑制され國産自給が渴望されてゐるもので、その合成の成功は我國の國防化学に大なる力を加へたと云ふべきである。アセチレンブラックはゴム混和用カーボンブラックの供給逼迫に連れ其の代用品として頗る重要性を加へて來た。

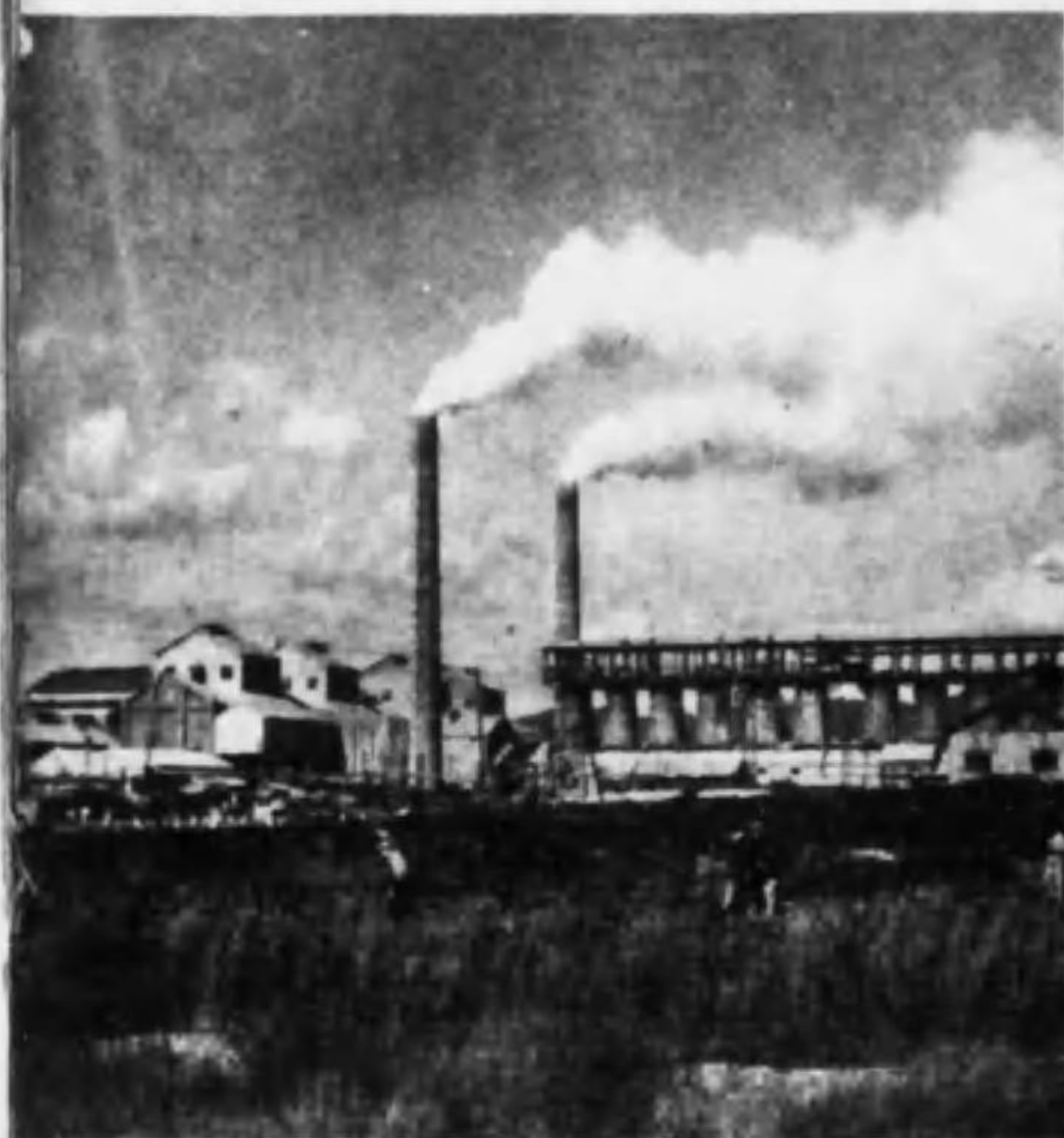
朝鮮窒素には又電極を製造するカーボン工場を有し、天然黒鉛又は人造黒鉛の各種電氣爐用電極、ソーダ電解用電極板及び電弧用のアークカーボン、電動機用カーボン刷子等の製造をも行つてゐるが、アークカーボンを除いては概ね自家用に供せられるもので、その年産額は12,000尾以上に達してゐる。

カーバイド工場及びカーボン工場に附屬する研磨剤工場に於てダイヤモンド(炭化珪素質研磨剤)及びチツランダム(アルミナ質研磨剤)を製造してゐる。之等研磨剤が生産力擴充基本資材として必須なることは改めて建設の要もないであらう。

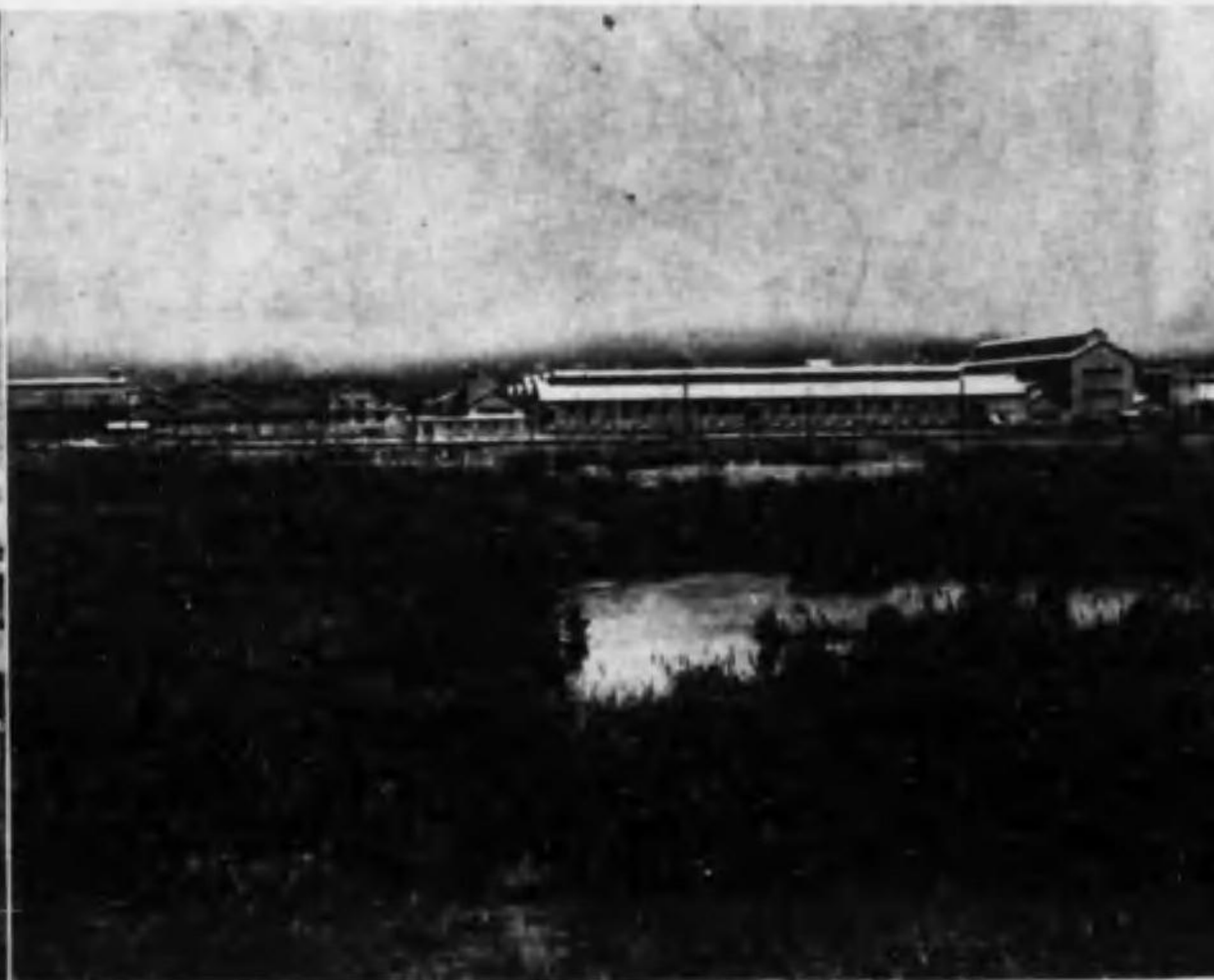
五、アルカリ事業

「日本窒素」のアルカリ事業は旭ペンベルグ延岡工場で人絹の原料として電解ソーダの製造を始めたのが最初で其の後本宮工場に於て豊富なる電力を利用して17,000尾の苛性ソーダを製造し、自家用數量を充足するほか一部を市販することゝなつた。之が副生鹽素の處理策として合成鹽酸、晒粉、液體鹽素、調味料、エチレングリコール、工業用鹽化アンモニア等の一聯の事業を興したのである。又最近には興南工場の石鹼、調味料等の原料として必要なソーダ灰の自給を目的として新にツアーン式アンモニアソーダ法が採用された。此の方法によれば一般のアンモニアソーダ法に於て廢棄せられる鹽素を鹽化アンモニアとしてアンモニアの固定に、石灰をカーバイド原料に使用することが出来る特徴がある。而して鹽化アンモニアは新窒素肥料としてその將來を注目されてゐる。

日本窒素本宮カーバイド工場



日本窒素本宮苛性ソーダ工場



六、金屬事業

朝鮮窒素は金屬事業としてアルミニウム、亜鉛を製造してゐる。又マグネシウムは日本マグネシウム金屬株式會社の事業であるが、工場は朝鮮興南工場内に在り其の經營も専ら朝鮮窒素の掌る所である。之等の金屬事業は主として豊富な電力を利用することに依つて計畫されたもので、マグネシウムは電氣爐製錬を行ひ、又アルミニウム及び亜鉛は電解製錬法に依つて(附近に在る日窒業開發株式會社の金、銀、銅等の製錬も同様電解製錬である)製造するもので、之等のために消費される大量の電力は朝鮮窒素所屬赴江發電所及び長津江水電株式會社の發電所より安價に供給せられてゐるのである。尙此外金屬事業に數ふべきものにバツセー法に依る製鐵製鋼事業があり、珪石、屑鐵及びヨークスを電氣爐で處理する高珪素鐵其他磷酸製造工程に副産する塊鐵、發生爐ガスより副生する鉄屑等もある。因に金屬ではないがアルミニウム原料用アルミナ製造に關聯して合成寶石の製造が日窒寶石株式會社の事業として興南工場内で行はれてゐる。

2. 永安工場

昭和6年未だ我國の斯業に對する關心も大ならざりし時代に液體燃料事業の國策的意義を重視して、先づ石炭低溫乾溜事業に着手すべく朝鮮咸鏡北道永安に大工場が建設された。之が朝鮮窒素永安工場である。何分共本邦に於ては全然未開の分野を拓くことであり各種の惡條件に見舞はれたが、惡戰苦闘の末、遂に現在見るが如き重油、輕油、酸性油等の精製からメタノールの合成、ホルマリンの製造、合成樹脂の製造までの一聯の化學工業體系を樹立し上げたのである。斯界の先驅者として我國産業に寄與するところ大なるものがあつたと云ふべきであらう。而してその尊い經驗は灰岩及び吉林に於ける人造石油事業の基底として甚大なる功績を擧げた。

朝鮮窒素興南アルミニウム工場



朝鮮窒素永安工場タール洗滌塔



一〇、長津江水電株式会社

1. 北鮮の水力電気

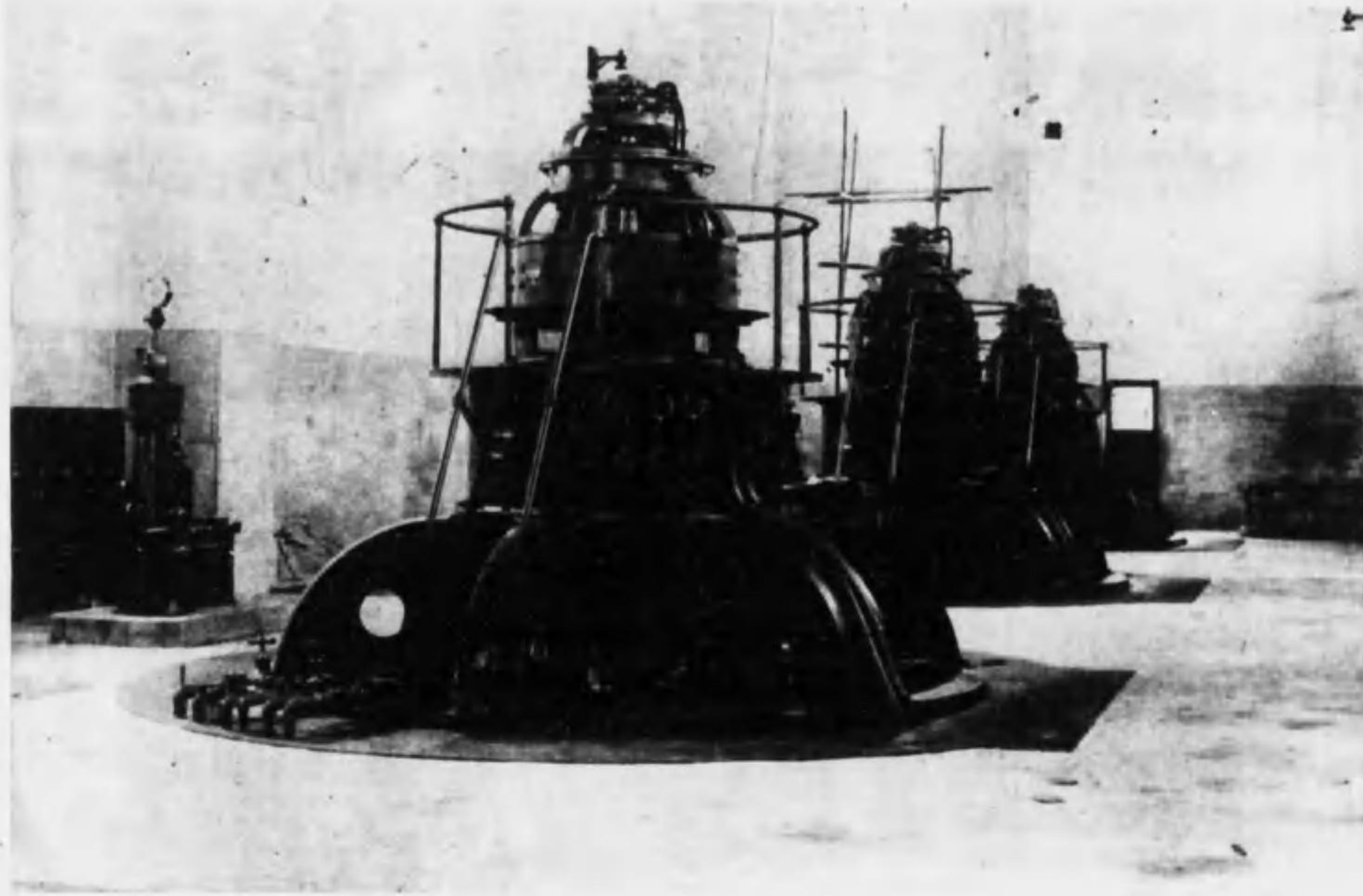
赴戦江の水力電気事業が起されるまで朝鮮半島には工業として殆ど見るべきものがなかつた。殊に電気事業は各都市に於ける小規模の火力発電所のほか何もなく半島の産業は金と朝鮮人釜位なものと思はれてゐた。赴戦江の〇〇萬キロワットの電力が先づ開發せられ、次いで長津江の〇〇萬キロワットが竣工し、咸鏡南道の興南及び本宮に「日本窒素」の大化学工場群が建設せらるゝに至つて半島は電氣の朝鮮、工業の朝鮮として面目を一新した。現在では之等の上に虚川江〇〇萬キロワットの發電工事が其の第一期の工を竣へ、更に世界に誇るべき鴨綠江の〇〇〇萬キロワットの大工事が着々とその偉容を鮮滿國境に現出しつゝある。全工事完成の曉には之等「日本窒素」に於て經營せられる發電事業は合計出力〇〇〇萬キロワットとなり、北鮮南滿の廣野と此の大電力とは實に昭和の工業日本に與へられたる新天地である。若き工業戦士の腕を振ふべき活舞臺はいま刻々建設せられつゝあるのである。

2. 長津江發電所

赴戦江の大水力の開發及び之を利用する多くの大化学工場の建設は「日本窒素」の將來に無限の發展を約束したのであるが、赴戦江の水源は内地の各發電所に比すれば甚だ豊富ではあると云ふものゝ早數年に渉る時は未だしの觀なき能はざるものがあつた。興南大工場百年の繁榮を期するために「日本窒素」は竿頭更に進めて長津江の水利開發の大工事に着手したのである。

長津江は鴨綠江の上流にある支流で、其の源を咸鏡南道咸興の西北に位する黄草嶺に發してゐる。此の川が海拔1,200米の高原を北方に緩流して狹隘なる溪谷となる所に大堰堤を築造して全流を堰き止め周圍一里の人造湖を現出せしめ、夏期雨量の多き期間に貯水し此の水を隧道により日本海側に落下せしめて、個所の發電所に依り階段的に高落差を利用

長津江水電長津江第四發電所



用して〇〇萬キロワットを發電するものである。

長津江の水利は赴戦江のそれに比して遙かに大きく極めて有利なものであるが、大なる資本、優れた技術、特に發生する電力の有効なる用途を有するものに非ざれば之を開發利用し得ない。「日本窒素」は多年三菱に屬してゐた此の水利權を獲得し昭和8年6月長津江水電株式會社を創立して工事に着手し順次發電を開始しつゝ昭和13年7月第一より第一に至る發電所の完成を見た。

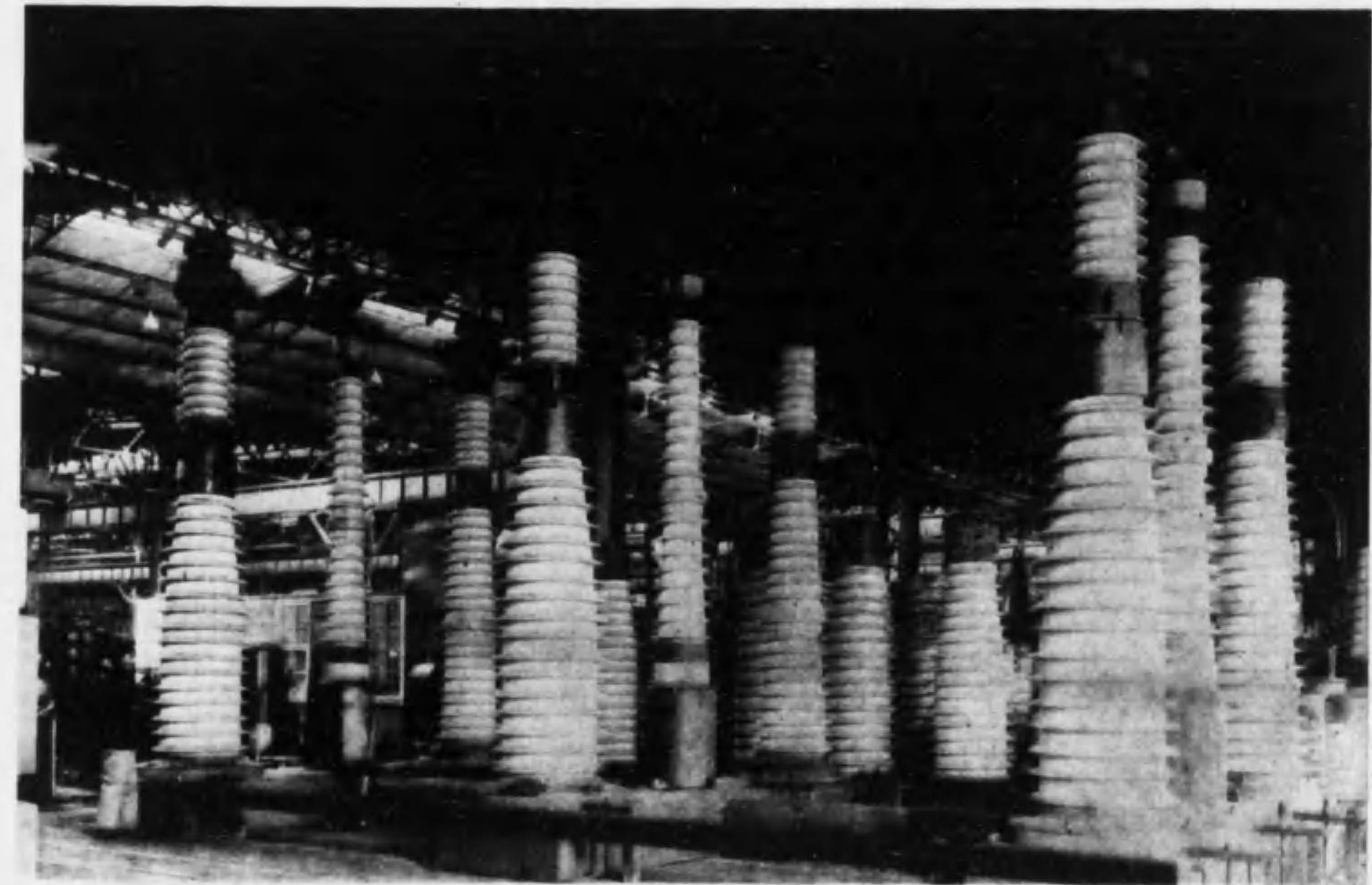
堰堤及び發電所工場は4,000尺の高原地帯で、9月半ばに雪を見五月に漸く解氷する地帯であるため、工事を速かに進捗せしむるため運搬交通機關と通信機關の整備が必要であつた。先づ新興鐵道株式會社をして160軒の鐵道を敷設せしめ、又2,000軒に亘る電話線を架設する等之等の準備工事は頗る大掛りなものであつた。

3. 虚川江發電所

虚川江も赴戦江長津江と同じく鴨綠江の支流をなし此の水を堰き止めて日本海岸の南大川に落しそこに高落差を得て個所に發電所を設け合計〇〇萬キロワットの電力を發生せしめんとするもので赴戦江及び長津江の方式と軌を一にしてゐる。只此の地帯は長津江上流と多少地形の性質を異にし廣面積の高原がなく大貯水池を設けることが出来ないため本流を數個のダムにて細切り各流域よりの集水を調整せしめ各貯水池の連繫操作により常時一定の水量を保たしめることゝなつてゐる。即ち虚川江の二つの支流黄水院江及び熊耳江の双方に堰堤を設け熊耳江蓮頭坪貯水池の水は之を一應黄水院江莎草坪貯水池に導き且つ黄水院江の上流に更に二個の貯水池を設けて莎草坪貯水池の貯水を調整する點及び南大川沿岸に於て各發電所の放水を次々に次の發電所に導いて使用するのみならず其の多數の支流を利用し小貯水池を設けて水を集める點に於てや、計畫が複雑となつてゐる。而して工事の大仕掛なることは赴戦江長津江を凌ぐものがある。

工事進行に當つては赴戦江、長津江の場合と同じく多種多量の機械器具、原料材料の必要なるは言を俟たぬ所であるが、輸送設備として特記すべきものに端豐鐵道株式會社がある。即ち長津江水電株式會社では端川より洪君に至る數十軒の鐵道敷設を計畫し、子會社端豐鐵道株式會社を創立して其の建設經營に當らしめることゝした。

長津江水電虚川江發電所用張張斷橋



一、朝鮮 鴨綠江水力發電株式會社

遠く鮮滿國境の東端 9,000 尺の高空に聳え立つ白頭山に源を發して蜿蜒 200 里、朝鮮と支那の境の鴨綠江は悠久幾萬年のその姿を今や一變せんとしてゐる。正に世紀の驚異である。「日本窒素」は眞に赴戰江、長津江及び盧川江の大發電工事を成し遂げたのであるが、更に痴人の夢と思はれてゐた鴨綠江の工事を數億の巨費を以て創めることゝなつた。

之がため滿洲鴨綠江水力發電株式會社（資本金 5,000 萬圓）、朝鮮鴨綠江水力發電株式會社（資本金 5,000 萬圓）が創立され、差當り一億圓の資本金（但し社債借入金は之の外である）を以て工事を進めることゝなつた。兩社とも滿洲側滿洲國政府、朝鮮側東洋拓殖株式會社、朝鮮送電株式會社、長津江水電株式會社（「日本窒素」）の出資に依るものである。而して此の大工事は長津江水電（「日本窒素」）がその全責任に於て建設と經營とを一任されてゐるのである。

鴨綠江の工事は赴戰江、長津江と著しく趣を異にしてゐる。工事の根本計畫は鴨綠江を 個所の大堰堤にて堰き止め 200 里の長江を 一つの大湖水と化しその各々に發電所を設けて合計 〇〇〇 萬キロワットの電力を得んとするのである。最初に着手されたる水豊發電所の最大出力は 〇〇 萬キロワットで、一個所の發電所に於て赴戰江、長津江の合計 個所の發電所の出力よりも遙かに大きいのである。

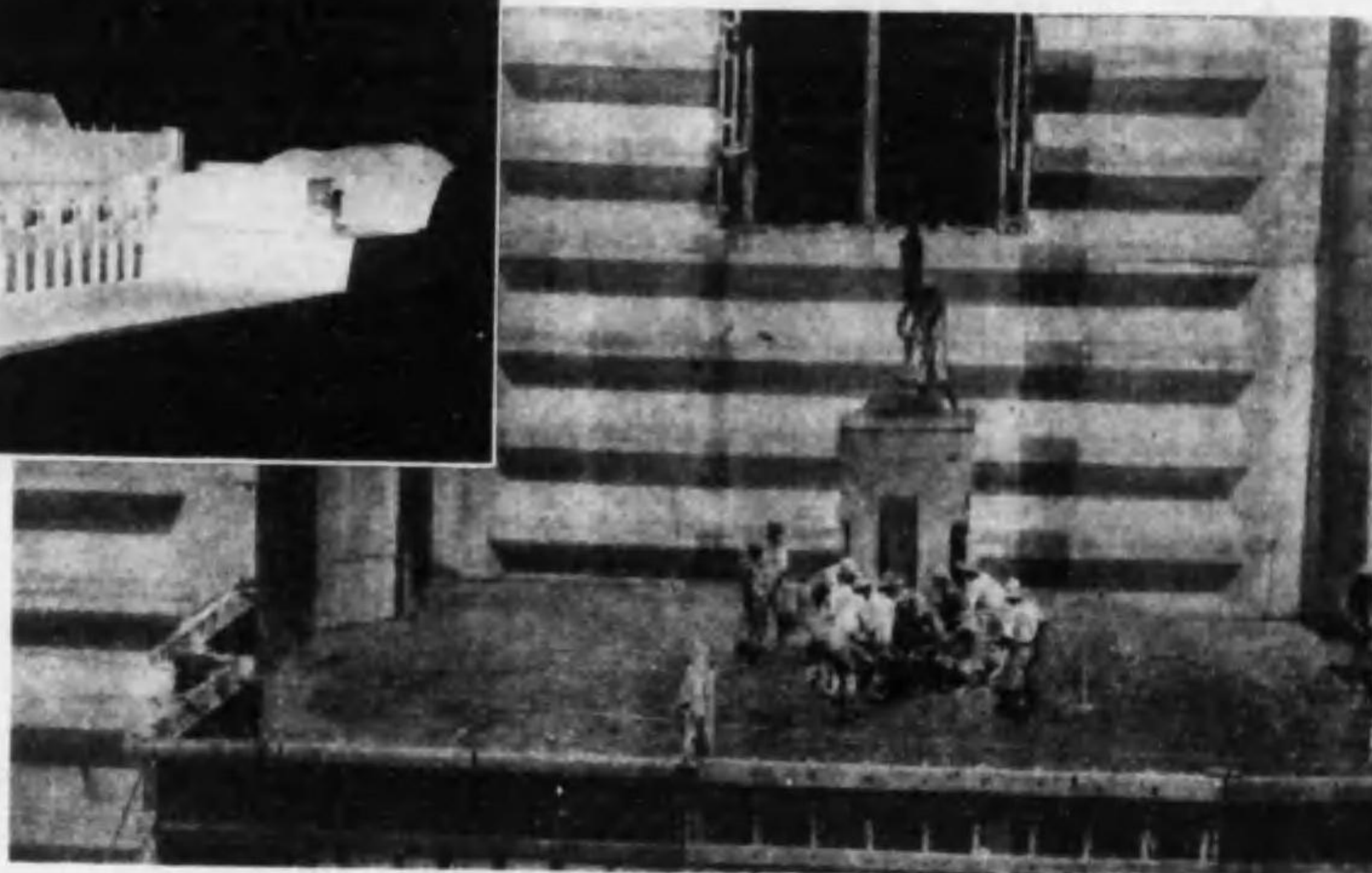
その堰堤は世界第一で、朝鮮平安北道水豊洞江岸より滿洲國寬甸縣碑碣子溝江岸に跨る長さ約 900 米容積 820 萬立方メートルのものである。之に依りて形成される大貯水湖はその面積 845 平方軒、琵琶湖の約半分霞ヶ浦の約二倍で人造の貯水池として北米ボルダダムに次ぐ恐らく世界第二のものである。發電所は堰堤直下の朝鮮側に建設せられ水車、發電機は世界最大の記録をなす 10 萬キロワット 〇 臺が取付けられる。

世界最大の堰堤 820 萬立方メートルの築造のため實に 75 萬噸 (1,500 萬袋) のセメントを要し此の大量のセメントを滿鮮の既設工場に求めることは到底出来ない相談である。それで運搬、納期等の關係をも考慮し年産 18 萬噸の能力の自家用セメント工場が建設せられることゝなつた。

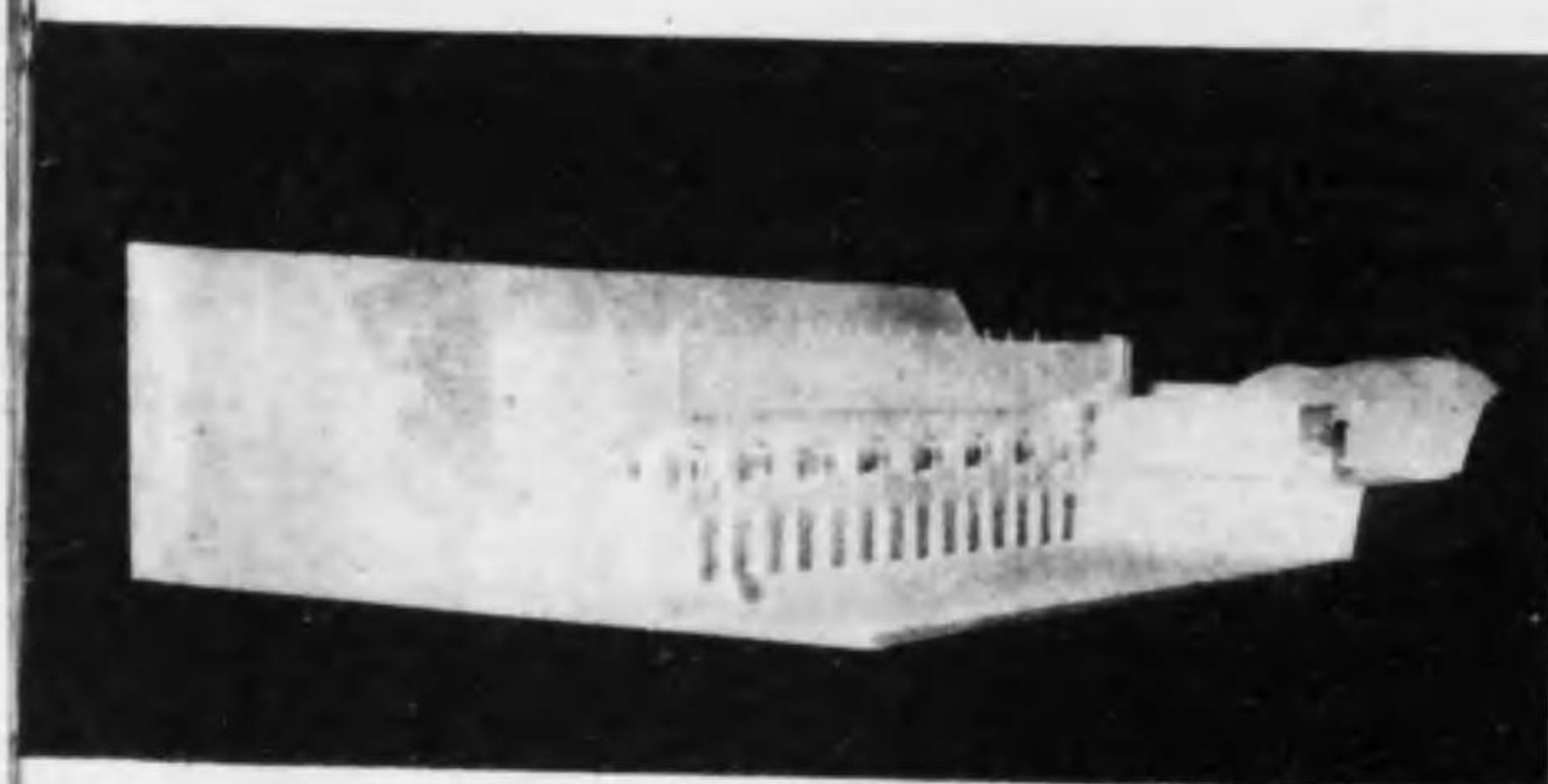
堰堤工事場は鮮滿洲側共に 1 日 8,600 立方メートルの混泥土を打ち得る様計畫され砂利採集設備、貯藏並に粉碎設備、篩分洗滌設備、混泥土混合工場、混泥土投入設備等總て世界的の大仕掛なもので、その他電気ショベル、機關車、クレーン、コンベアー等施設は大規模且つ多岐に涉り之等設備に必要な準備工事用電力のみにも 8,000 キロワットを要する。

工事資材の運輸、工事係員人夫の交通、食料品其他需要物資の運搬のために併せて國防上の見地より鴨綠江の南即ち朝鮮側に平北鐵道、北即ち滿洲側に鴨北鐵道の二會社が各々 1,000 萬圓の資本金を以て設立された。

鴨綠江水電水豊堰堤コンクリート工事状況



鴨綠江水電水豊發電所模型



一二、日本窒素火藥株式會社

日本窒素火藥株式會社は最初に火藥工場を延岡市南端に自然の地形を巧みに利用して建設し更にプラスチック工場及び雷管工場をも建設した。此の外福岡縣小倉市にも工場を有し導火線及び雷管を製造してゐる。之等を合すれば敷地面積 15 萬坪、従業員 2,800 人餘を擁する資本金 700 萬圓の大會社である。

火藥工場は現在ダイナマイト 25 萬、硝安爆藥 5 萬の日産能力を有してゐる。その外レザー（擬革）、薄葉紙、硝化棉をも製造してゐる。その原料たる硝酸、硫酸、硝酸アンモニア、コットンリンター等は旭ベンベルグ延岡工場より供給せられグリセリンは朝鮮窒素興南工場より送られる。雷管工場では銅條を壓搾成型せる管體にテトリール及び雷管を裝填して雷管を製造してゐる。プラスチック工場では火藥工場にて製造せる薄葉紙を原料として製造する硝化棉と特殊の高級可塑劑とを以てチツソロイド（無樟腦セルロイド）を製造してゐる。樟腦を使用しない此の特色あるチツソロイドは全く無臭で食料品、藥品、歯みがき等の容器として最適で最近盛に使用されてゐる。

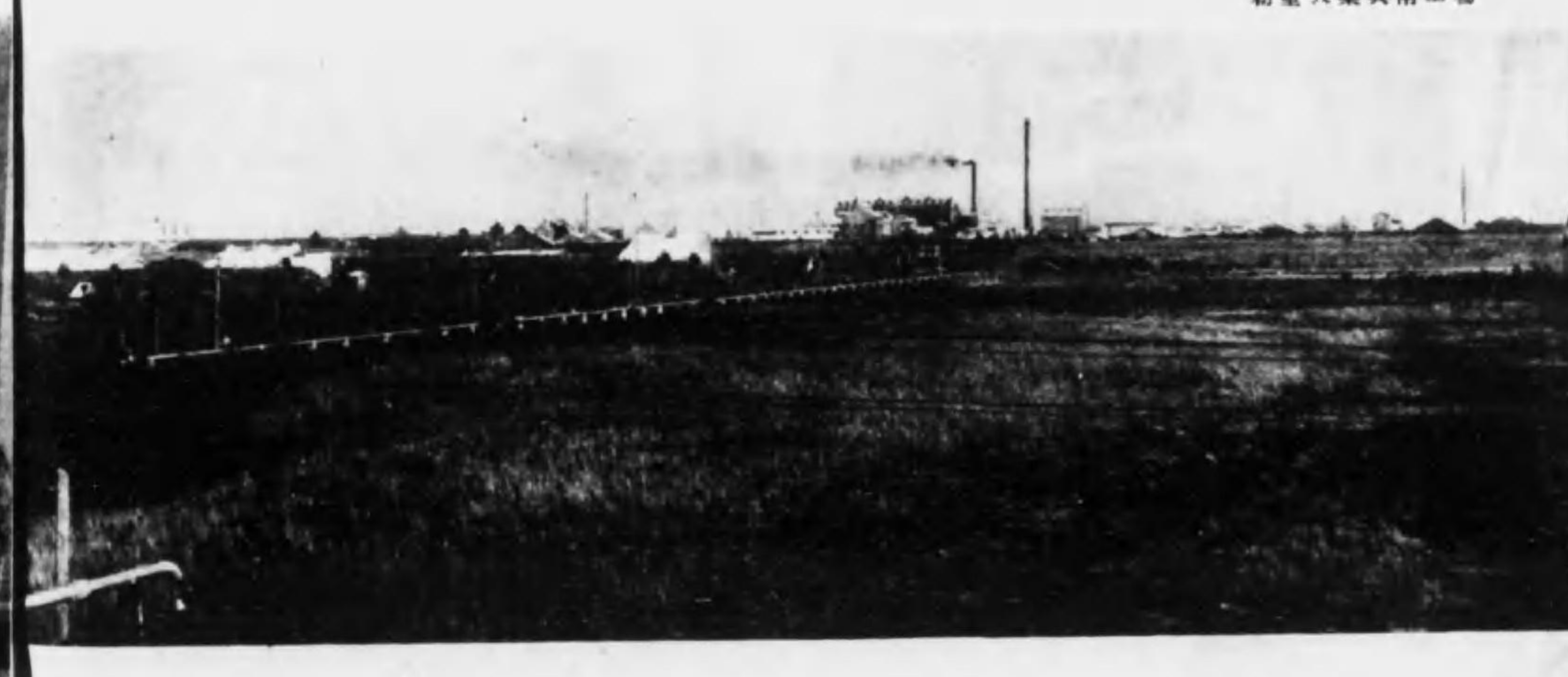
小倉工場は火藥を使用する際必要な緩燃導火線及び電気雷管等の火工品を製造してゐる。

一三、朝鮮窒素火藥株式會社

朝鮮窒素火藥株式會社は昭和 10 年朝鮮及び大陸の新市場開拓を目的として設立せられ、朝鮮窒素肥料株式會社興南工場の附近に工場を建設した。之により産金國朝鮮は遠く内地より火藥を移入せねばならなかつた不便を一掃せるのみならず、近頃では盛に大陸方面に輸出するに至つた。現在資本金 1,000 萬圓を有し 60 萬坪の敷地の内に附屬施設を合せ百十數棟の工場が並び、千數百人の従業員が業務に精勵してゐる。朝鮮火藥が日窒火藥と異なる所は、朝鮮窒素肥料興南工場よりアンモニア及び酸素等の供給を受けて硝酸及び硝酸アンモニアの製造を自ら行つてゐる點である。其の他グリセリン、硝酸、鹽化アンモニア等は朝鮮窒素から、硝化棉は日窒火藥から夫々供給を受けてゐる。

朝鮮火藥興南工場では日窒火藥と同様の方法でダイナマイト、硝安爆藥、導火線等を製造してゐるが、ダイナマイトは現在日産能力 28 萬なる所之を 58 萬に増産すべく既に増産工事が進められて居る。導火線は日産 85 萬米への擴張工事が既に略半ばを完了した。其の他にカーリット即ち過鹽素酸アンモニアを主要原料とする爆藥及び窒化鉛を原料とする所謂アルミニウム雷管の製造工場も着々建設中である。尙外に特別の使命を荷つて日夜努力を續けてゐるのであるが茲には其の記述を省略する。

朝鮮窒素火藥興南工場



一四、朝鮮石炭工業株式會社

朝鮮石炭工業株式會社（資本金 1,000 萬圓）の事業は誇りに足る畫期的新事業の一つである。「日本窒素」は埋藏量 2 億噸と稱せられる北鮮阿吾地の大炭田の中心灰岩洞の地に我國最初の一大人造石油工場を建設し純國産の技術と機械を以てして其の成果を世界に問はんとするものである。

永安工場に於て石炭低溫乾溜事業の深い經驗を得た「日本窒素」は灰岩工場に於て現代化學工業界の最高峰人造石油事業を他に率先して實現せしめるに至つたのである。灰岩工場の建設工事は昭和11年より純然たる國産の技術と資材とを以て夜を日についで進行され、昭和12年中には略工事を完了し、昭和13年2月より工場の試運転に移つたが、果然優良なる油の生産を見、茲にドイツのロイナ、イギリスのピリンガムに次いで世界に於ける人工油田の第三次の噴油は實現したのであつた。歐米各國の特許方法より全く獨立せる日本法の成功である。爾來専ら全工場の調整に力を注いだ結果遂に本格的操業の域に達し、其の製品も各方面に試用販賣せらるゝに至つた。而して此の成功に依り直ちに擴張工事に着手し目下着々進行中である。灰岩工場の設備は勿論頗る宏大なもので、殊に單位設備としては世界に冠絶し、其の堂々たる偉容は實に觀るものをして大なる信頼の念を抱かしめるものである。

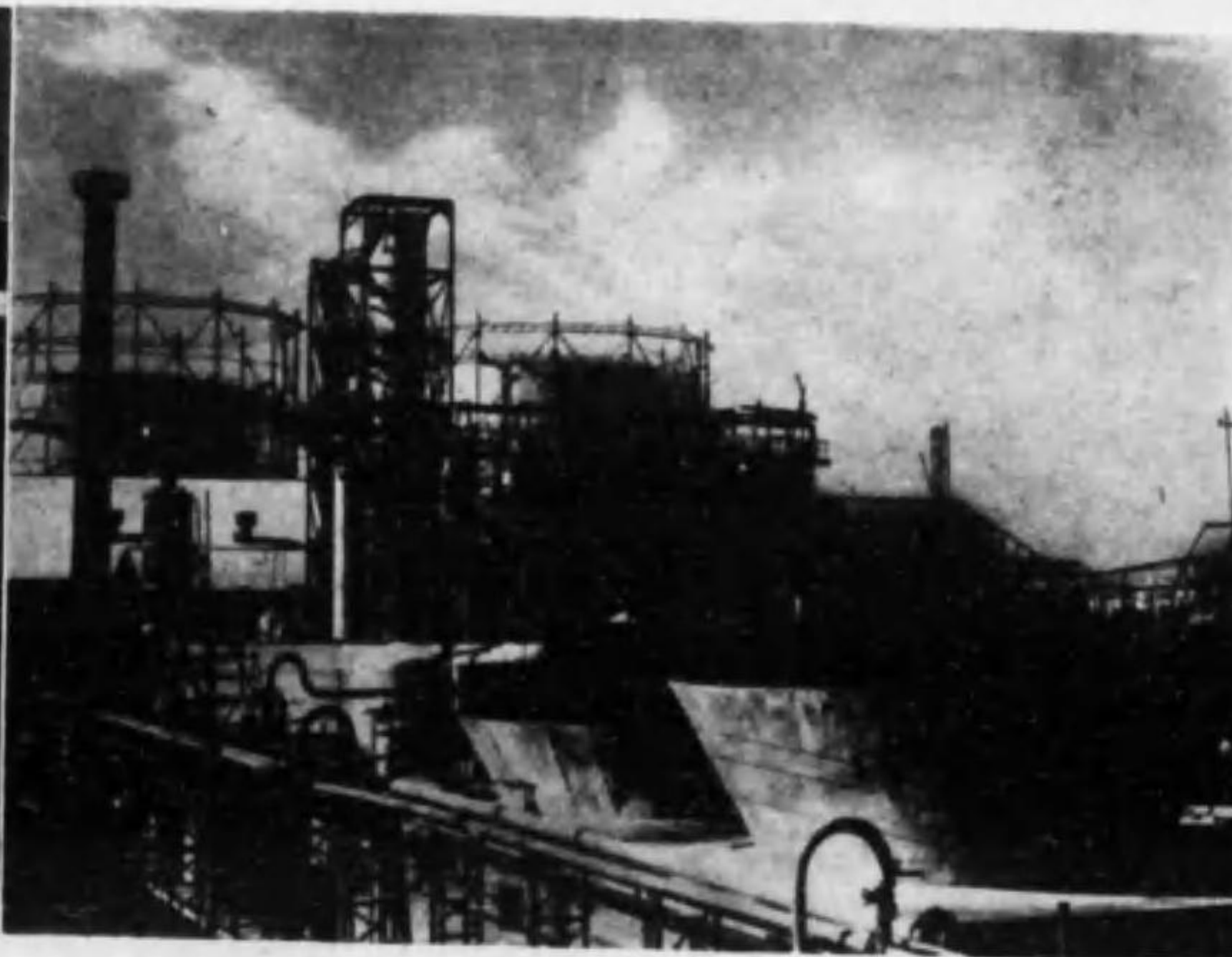
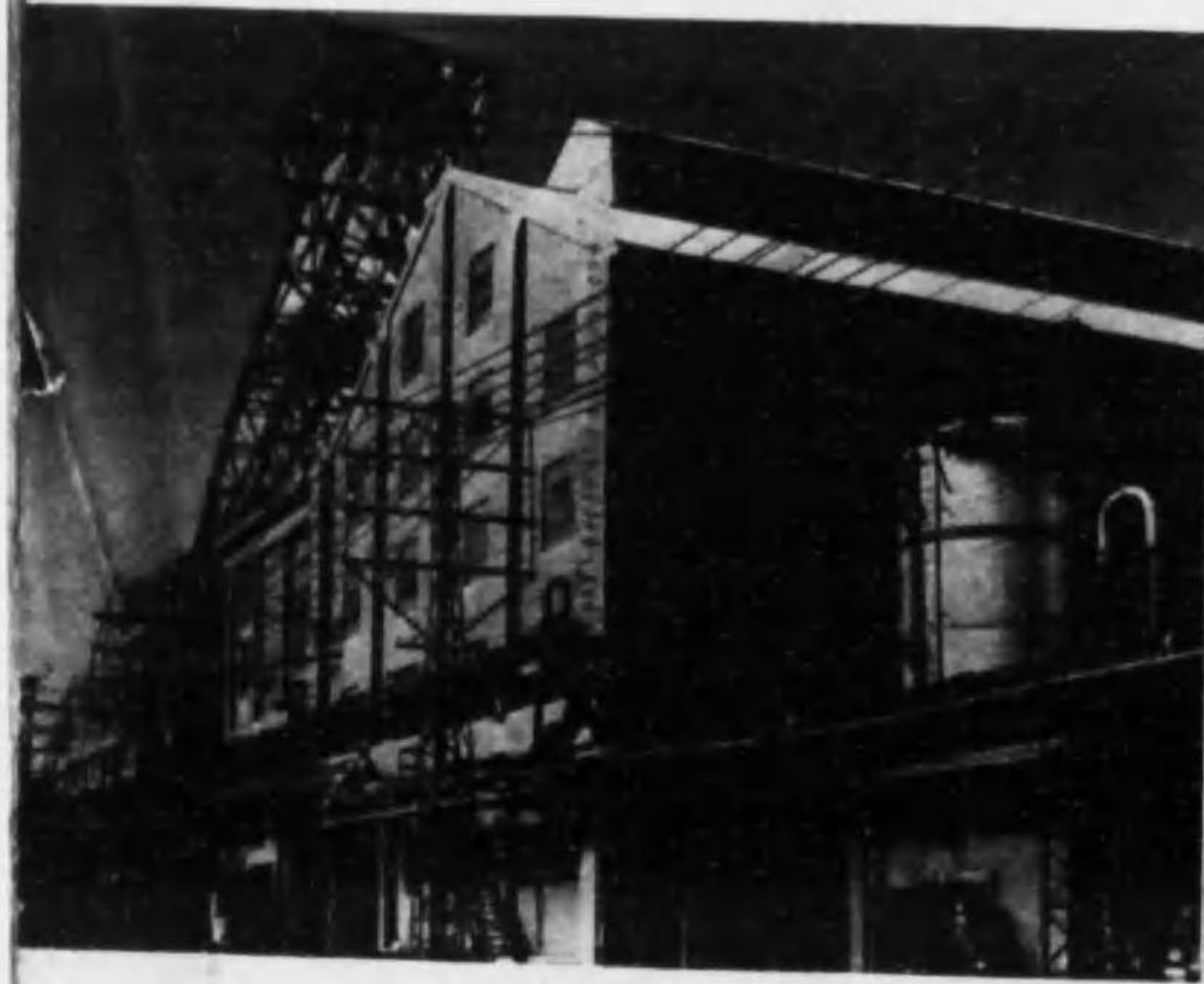
一五、吉林人造石油株式會社

昭和14年9月滿洲國に設立せられた吉林人造石油株式會社は前記灰岩工場にて基礎附けられた「日本窒素」の人造石油技術の一大飛躍の姿である。滿洲國産業計畫中に盛り込まれた石炭液化事業計畫は此の「日本窒素」の積極的關與により一大光明を點ぜられた觀がある。其の資本金 1 億圓は滿洲國政府 5,000 萬圓、日本窒素肥料株式會社 3,000 萬圓及び帝國燃料興業株式會社 2,000 萬圓の投資に係り、事業經營は一切「日本窒素」に委されてゐる。「日本窒素」より派遣された少壯有爲の職員達は今や報國の熱情に燃えながら工場の建設事業に餘念がない。工場敷地は目下都市計畫中なる吉林市街の南側に隣接し、社宅等の用地を含めて廣茫 200 萬坪、昭和16年迄に其の第一期工事完成の豫定である。雄大な建設工事の響は來るべき黎明を告げる如く力強く北滿の曠野にこだましてゐる。

吉林人造石油株式會社の人造石油事業は吉林を隔たること遠からぬ舒蘭炭田（埋藏量10億噸）の出炭を利用して行ふもので、同炭田開發の目的を以て舒蘭炭田株式會社（資本金 1,000 萬圓）を設立して之が經營に當らしめ、又之が輸送を主目的とする吉林鐵道株式會社（資本金 500 萬圓）を設立して四家房、龍潭山間の鐵道經營を行はしめることとし目下共に着々計畫實施中である。

朝鮮石炭工業灰岩工場（羅津要塞司令部許可済）

朝鮮石炭工業灰岩工場（羅津要塞司令部許可済）



一六、旭ペンベルグ絹絲株式會社

旭ペンベルグ絹絲株式會社は延岡市及び大津市に於て人絹、其の原料藥品及び硝酸其の他の化學藥品を製造する資本金 4,600 萬圓の一大綜合化學工業會社として業界に重きをなしてゐる。

1. 延岡工場

延岡工場は宮崎縣延岡市に在りペンベルグ部、レーヨン部、藥品部の三工場を綜括するものである。現在敷地面積は約35萬坪、従業員 15,000 人を算する大工場で、單に人絹の製造を行ふのみならず、之に必要な重要原料品の殆んど總てを安價に自給してゐる點を特徴とし、其の他に所屬發電所としては水力5ヶ所、火力2ヶ所、出力 75,000 キロワットに達する大規模のものを所有してゐる。「日本窒素」の事業部門として經營せられる人絹事業の優越性は之等の點よりも充分窺ふことが出来る。

延岡工場の主要製品たるペンベルグ絹絲は水酸化銅アンモニア溶液を以てコットンリッターを處理し獨特の緊張紡絲法に依つて製造する高級人造絹絲で、其の名聲は夙に一般人口に膾炙され、其の日産能力25萬の工場は本邦唯一たるのみならず單一工場設備としては本元のドイツペンベルグ會社をさへ遙に凌駕し、世界に冠たる我が人絹工業に在つて特異の重要な地位を占めてゐる。レーヨン部は所謂ゲイスコース人絹の製造をなすものであるが、日産40萬の能力を有し設備の斬新にして宏大なるを誇りし就中旭マルチの聲價は特筆に値するものである。

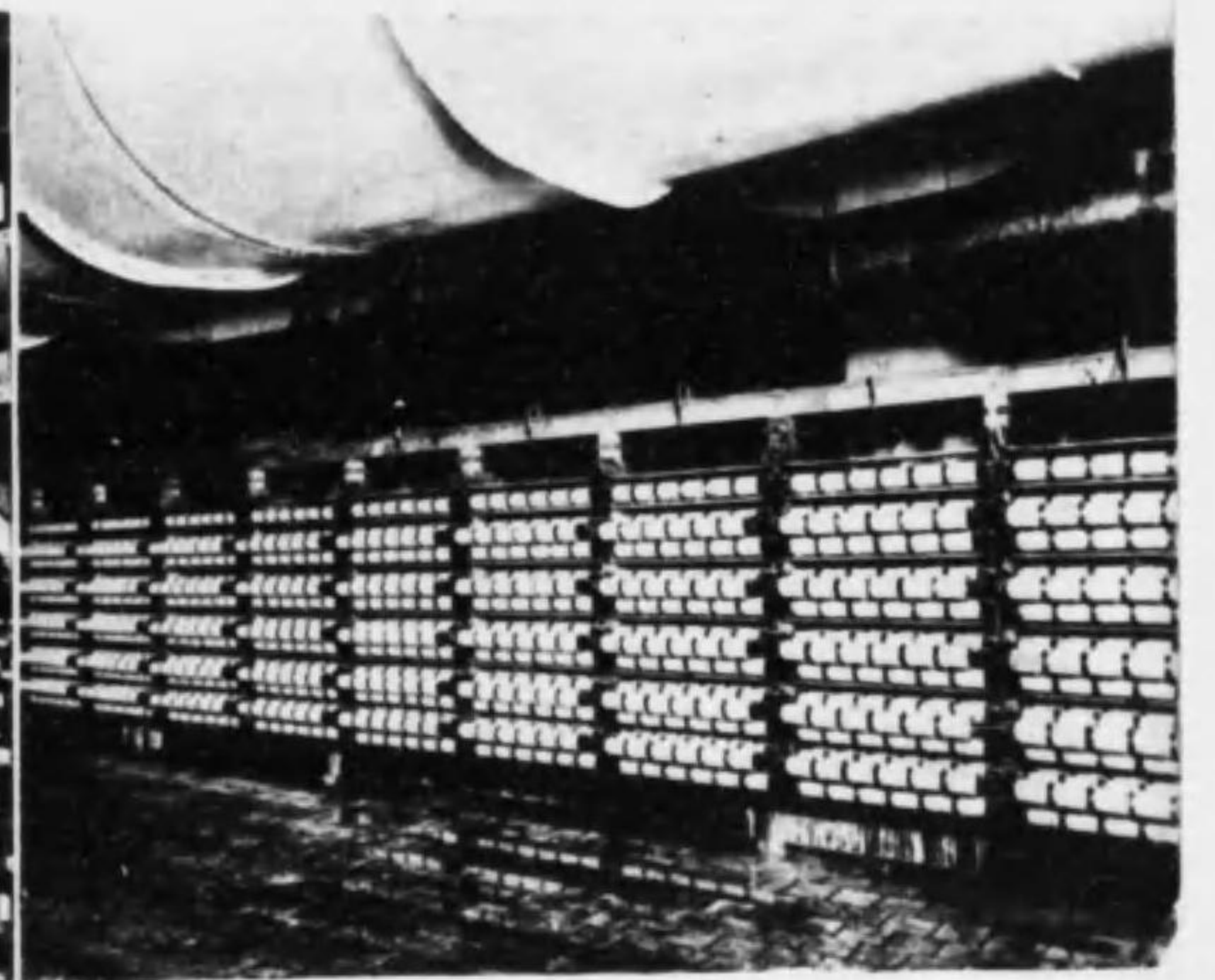
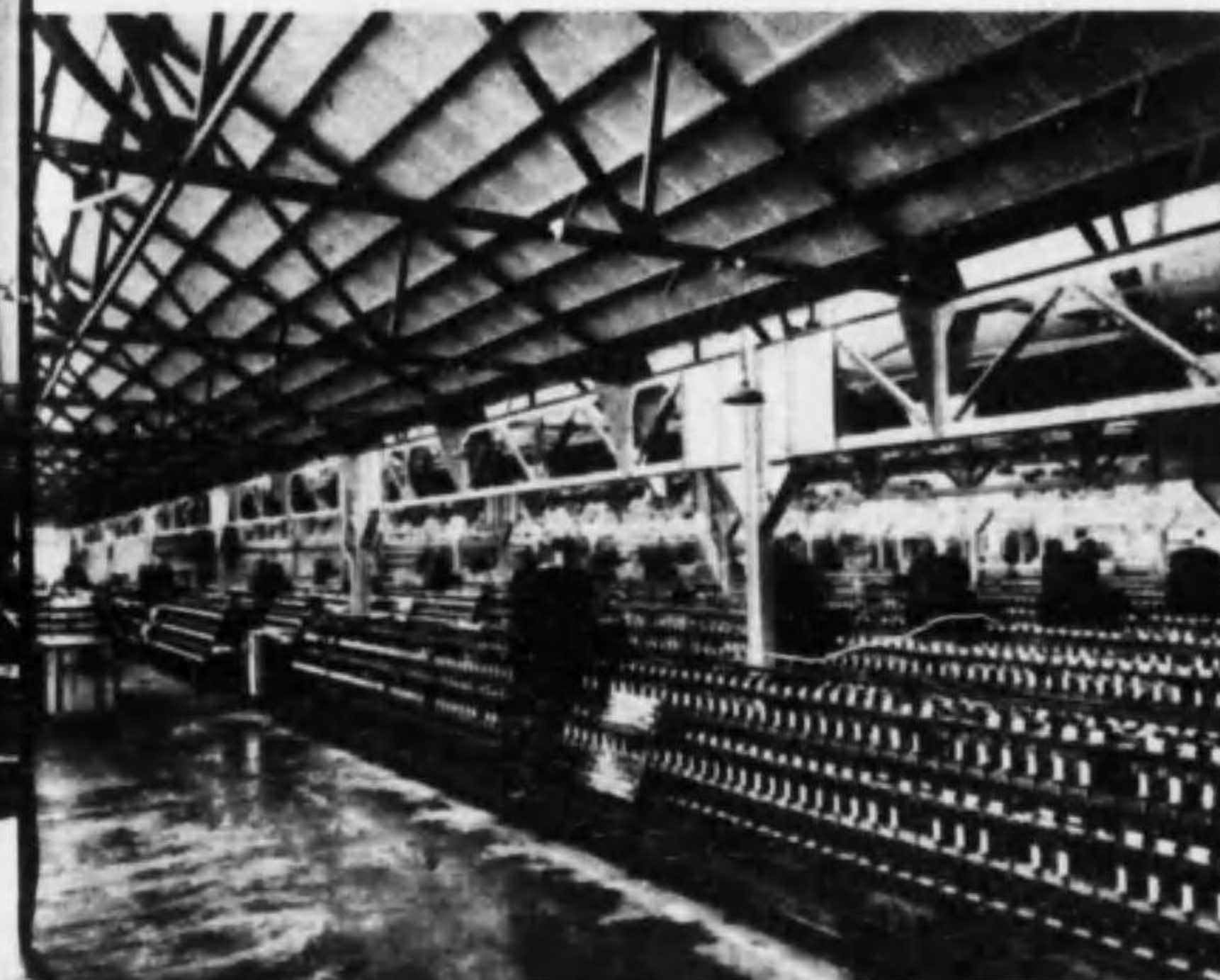
之等人絹の原料藥品は殆んど全部藥品部に於て自給しペンベルグ絹絲製造用のアンモニア合成工場があり、苛性ソーダは自家發電に依り食鹽を電氣分解して製造し、二硫化炭素は木炭硫黄等を原料として自給し、硫酸も亦豊富な自家製品を有する。藥品工場は人絹の原料藥品製造工場たるに止まらずアンモニアより硝酸及び硝酸アンモニアを製造して市販するほか、之等を硫酸、コットンリッターの一部と共に近接する日本窒素火藥株式會社に火藥等の原料として供給し、又苛性ソーダ製造に伴ひ晒粉、液體鹽素、調味料、亞硝酸ソーダ等をも製造してゐる。

2. 大津工場

大津工場は琵琶湖畔栗津の青松に臨んで建設せられた本邦最初の人絹工場である。ステーブルファイバーが人絹界の問題となるや、逸早く全工場を擧げて之に轉じ、長年に亘り錬磨された人造絹絲製造技術に斬新なる研究を加味し、次々と獨特の優秀製品を世に送り出し、旭ルフト、旭アセトルフト等何れも本邦ステーブルファイバー界の最高峰を行く高級品として時局下纖維界に多大の貢獻をなしてゐる。大津工場に於ても自家發電所を有し、苛性ソーダ、硫酸等ハルプ以外の總ての原料品を自給してゐる。

旭ペンベルグ延岡ペンベルグ工場

旭ペンベルグ延岡レーヨン工場



一七、日窒工業開発株式会社

日窒工業開発株式会社（資本金 1,000 萬圓）は古くから朝鮮に多数の金山を所有して金の採掘製錬及び之に附属する銀、銅、鉛等の製錬を行つてゐた。昭和12年10月「日本窒素」の傘下に入つて其の企業の一翼を荷ふこととなり、その鑛業部門に大きな勢力を増すこととなつた。次いで金山の外朝鮮窒素の經營する硫化鐵鑛、明礬石、螢石等の鑛山をも繼承するに至り、又支那事變後は大陸進出の任務をも荷ふこととなつた。

鑛山は殆んど全鮮に亘つて存在し、數十ヶ所に及んでゐる。金山として光陽、慈城、吉祥、文明、多徳、廣長（廣長金山株式会社と稱する別會社の事業として經營）等が現在朝鮮有数の地位にある。昌徳、靈興等の鑛山より硫化鐵鑛が硫酸原料として、加沙島鑛山より明礬石が硫酸加里及びアルミニウムの原料として朝鮮窒素肥料興南工場に送られてゐる。最近アルミニウム製錬に必要な螢石の鑛山をも開發し、其の産鑛を朝鮮窒素に供給してゐる。

金鑛の製錬は朝鮮窒素興南工場に隣接せる興南製錬所で行はれ、金、銀、銅、鉛等を産出する。興南製錬所には内地に於ける日窒工業株式会社産出の銅鑛及び各工場にて硫酸製造用に供せられた含銅硫化銅の燒滓が送られて来て金精錬に使用されてゐる。尙製錬行程中に於て多量に發生する廢ガス中に含まる、硫黄分を回収して硫酸を製造し之を朝鮮窒素火藥株式会社等に供給利用することを計畫し近く其の實現を見る筈である。

一八、日窒工業株式会社其他

日窒工業株式会社（資本金 500 萬圓）は「日本窒素」に於て年々數十萬圓の消費をなす硫化鐵其の他硫酸原料鑛石の自給を理想として設立されたものであるが、現在は更に銅鑛、鉛亜鉛鑛、鐵鑛、水銀鑛、石炭等の鑛山をも經營するに至つた。「日本窒素」では更に硫黄鑛を開發して一部は硫酸製造に用ひ、又アンチモン及び水銀を製錬して事變下必須の金屬の供給に貢献せんとしてゐるが、之等は別に日窒硫黄鑛業株式会社（資本金 300 萬圓）、大和アンチモン株式会社（資本金 20 萬圓）及び東洋水銀鑛業株式会社（資本金 300 萬圓）をして夫々其の經營に當らせてゐる。

日窒工業株式会社の硫化鐵の鑛山は和歌山縣勝浦鑛山、滋賀縣土倉鑛山其の他十數ヶ所に在り主として含銅硫化鐵鑛を産し、外に數ヶ所の銅鑛山がある。硫化鐵は「日本窒素」各工場に送つて硫酸製造用に供し、其の燒滓銅分は日窒工業開發興南製錬所に送られ金の製錬に使用される。

鉛、亜鉛鑛の採掘は目下埼玉縣秩父鑛山に於て起業中であり、朝鮮窒素興南工場に送つて製錬する豫定である。

石炭は長崎縣江迎鑛山より産出し、コークス原料炭として極めて好適の品質を有する。外に北海道にも炭鑛開發中である。

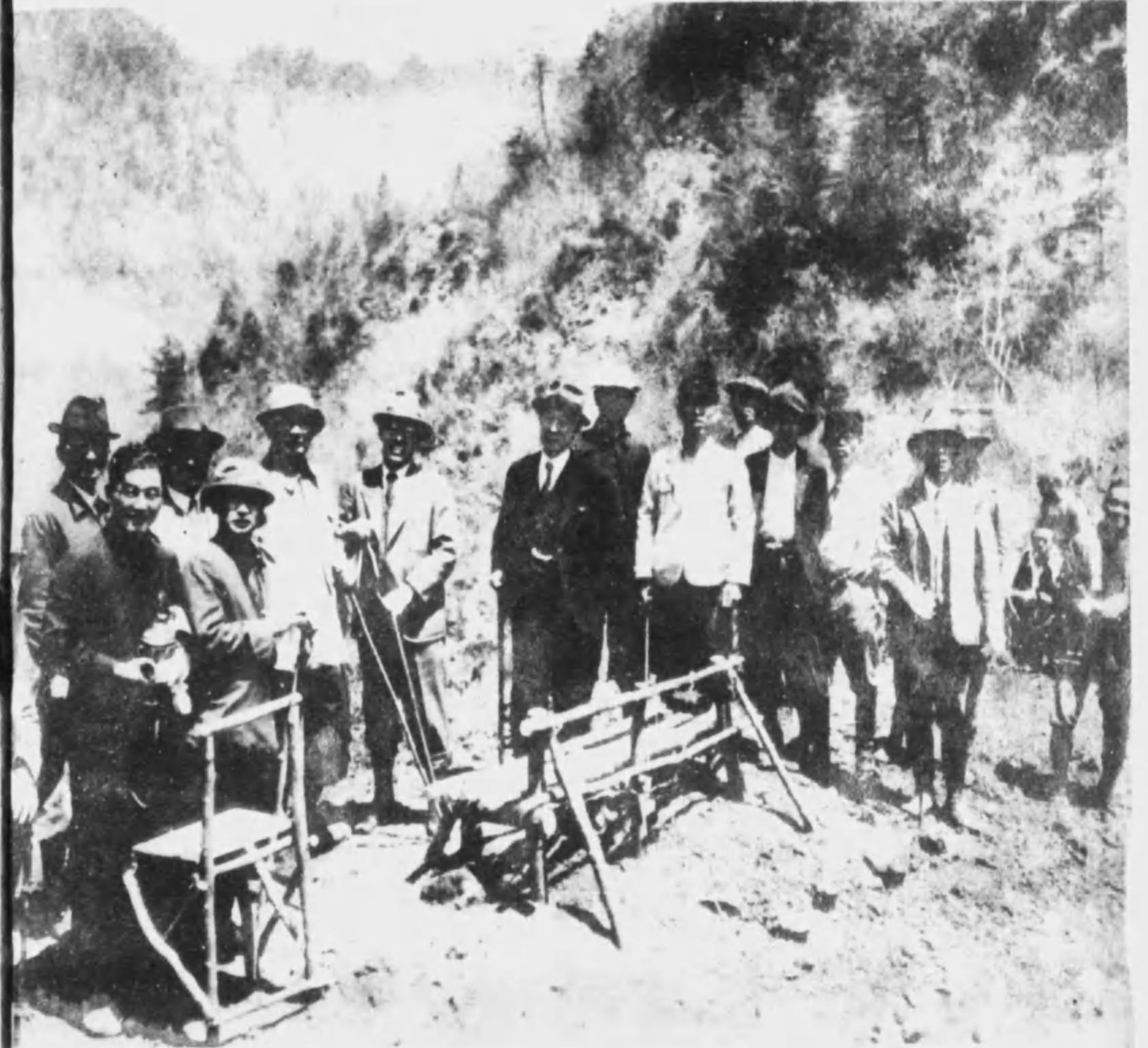
尙日窒工業株式会社では滋賀縣木之本に硫酸工場を建設し、隣接する土倉鑛山の産鑛を利用して硫酸を製造し一般に市販し、燒滓たる銅は興南製錬所に送つてゐる。

硫黄は日窒硫黄鑛業株式会社草津白嶺鑛山及び横手山鑛山より多量に産出されてゐる。近時其の輸送に資することを主目的として草軽電氣鐵道株式會社を其の傘下に收めることとなつた。

アンチモン鑛は大和アンチモン株式會社の奈良縣神戸鑛山より産し、之に特殊の電氣製錬を加へて金屬アンチモンを製造せんとしてゐる。

水銀は東洋水銀鑛業株式會社の北海道天鹽鑛山で採掘製錬してゐるが、更に日窒工業株式会社は十勝鑛山に於て大規模の設備を施工しつゝある。

日窒工業秩父鑛山視察中の野口社長及び其の一行



印 明	昭和15年7月15日
發 行	昭和15年7月20日
改訂再版發行	昭和15年7月31日
	大阪市北區宗室町一番地
	日本窒素肥料株式會社
監 督 人	山本登美雄
監 行 人	東京市京橋區區民三丁目三番地
	株式會社 野口 駿 尾
印 刷 所	大阪市北區宗室町一番地
	日本窒素肥料株式會社
	(非賣品)

特250

456



終